

委員分析結果

委員分析文中に述べられている見解は執筆者個人のものであり、内閣府としての見解を示すものではありません。あらかじめ御了承ください

委員分析文を読む際の留意点

①、②、③・・・といった番号は、調査対象を表しています。

一部の委員の分析文においては、全日制・普通科高校について次のような分類を行っています。

- ・「大学・短大進学者が多い全日制・普通科高校」

高等学校のHPにて公表されているデータ等から、大学・短大進学率を算出し、当該高等学校が所在する都道府県の大学・短大進学率よりも高い全日制・普通科高校。

- ・「高等教育機関（専門学校を含む）進学者が多い全日制・普通科高校」

「大学・短大進学者が多い全日制・普通科高校」に該当しない高等学校のうち、HPにて公表されているデータ等から、専門学校を含む進学率を算出し、当該高等学校が所在する都道府県の進学率よりも高い高校。

- ・「高等教育機関（専門学校を含む）進学者がそれほど多くない全日制・普通科高校」

「大学・短大進学者が多い全日制・普通科高校」及び「高等教育機関（専門学校を含む）進学者が多い全日制・普通科高校」以外の高校。

就労者・無業者のケースを中心に

首都大学東京都市教養学部教授 乾 彰 夫

Findings

就労中の者はアルバイトが多数、正社員などは少数だった。求職手段ではハローワークを利用した者は少数、多くは求人情報誌や携帯電話の求人サイトなどが、あるいは友人・知人など私的ネットワークに頼っていた。中退歴や「18歳未満」という年齢などが就労の制約になる場合が見られたとともに、劣悪な労働条件と考えられる就業環境も多く、不本意な離転職も少なくなかった。ただし安定した仕事に就いている者は、成長経験を積み将来展望を見いだせている傾向が見られた。

無業の者の中には身体的・精神的疾患を抱えた者もあり、不安感を抱えるなど不活発状態で家族以外の人間関係も希薄な傾向が見られた。

就業者・無業者とも中退後に新たに同世代の友人関係が広がっている様子はあまり見られず、在学時までのものが中心だったが、中退後は在学者と時間が合わないなどで途切れがちになる者も見られた。就労の傍ら通信制高校に通ったり再入学・編入学を志す者もいるが、就労することなく通信制・予備校などで勉学を続ける者に比べ、大学進学よりは高卒資格取得を目的とする者が多かった。

支援の課題として、第一に正社員などの体験している成長経験と同様のものを広く保障できる方策、第二に孤立感や不安感を特に強く抱える者たちへの支援、第三に学校への復帰や職業紹介、支援機関紹介などを含め、中退校やその教員らとの関係を継続できるための方策、第四に再就学や資格取得のための経済的支援などがあげられる。また18歳などの年齢的節目を様々な契機として意識する者も多く、支援のタイミングを考える一つのポイントである。

中退者の多くは中退後、何らかの形で就労している。調査票調査では回答者1,176人のうちの56.2%（正社員等9.6%、フリーター等43.4%、家業等3.4%）が何らかの形で就労中だった（なお、高校・大学・専門学校に在籍中の就労者は9.9%）。その一方で、現在職がなくて仕事を探している者や家事手伝い、特に何もしていないなど就労にも勉学にも携わっていない者もいる。調査票調査では仕事を探している者と、家事手伝いや何もしていない者の割合はそれぞれ1割あまり（仕事を探している9.6%、家事手伝い等7.6%、特に何もしていない4.0%。ただし、同時に働いている者を除く。）合わせて2割ほどだった。これら、就労している者たちや、就労も勉学生活もしていない無業者たちは、どのように過ごしていて、どのような問題に直面しているのだろうか。

本稿では面接調査時に就労している者、及び仕事を探している、家事手伝い、特に何もしていないなどの者に焦点を当てて検討する。今回の調査では、面接調査時に就労していた者は男性11人、女性12人の計23人で、調査票調査の結果とほぼ同じ割合である。そのうち、男性4人と女性4人が通信制高校（6）専門学校（1）通信制大学（1）に在籍していた。さらに男性1人が高卒認定試験に合格し大学受験中だった。また仕事を探している、家事手伝い、特に何もしていないなどの無業者（育児中を除く）は男性3人、女性1人の計4人であった。

なお、本稿で扱う以上27人中退した高校を学校タイプで見ると「大学・短大進学者の多い全日制普通科高校」に在籍した者が2人しか含まれていないことも、大きな特徴である。

1 就労中の者たち

まず就労中の者たちを見てみたい。就業形態では4人が正社員・契約社員等で働いており、全員男性。17人がアルバイトだった。このほかに2人が家業等の手伝いであったが、病気療養や大学受験準備の傍ら、ともにごく短時間就労している状態だったことからここでの分析対象からは外している。就労中の者の全てが正社員を希望したり長く継続できる仕事を求めているわけではないとはいえ、圧倒的に多くがアルバイト就労であり、正社員になれているのはわずか、それも男性ばかりという事実は、高校中退・若年者にとって、現在の労働市場環境が非常に厳しいことを示している。そうした厳しい状況の中で、どのようにして仕事を見つけたのか、働く中でどんな体験をしてきているのか、将来に向けてどんな展望を持っているのかなどを面接調査で語られたことに即しながら考えてみたい。

(1) 仕事を見つける

在学時からの継続

はじめに、どうやって仕事を見つけたのかという点について見てみよう。比較的容易に就労先が確保できているケースでは、既に在学中から就いていたアルバイトを中退後も継続している者が多かった。

「地元のファミレスで、高校一年生からずっとやってます」(1)や「在学中にしていたアルバイトを時間を増やしてもらってそのまま続けて」(2)など、現在就労中の者たちの半数は中退直後には在学中からのアルバイトを続けていた。ただしその中には、同じアルバイトを3年4年と面接調査時まで続けていた者もいれば、その後離転職した者もいる。

中退後の求職と求職手段

中退後の求職において、公的機関を利用している者は少ない。面接調査で確認された範囲でハローワークを利用したことがある者が4名いたものの、それを通して就職できた者は1名だけだった。3は中退後まもなくハローワークを通して居酒屋に社員(正社員又は契約社員と考えられる。)で採用された。しかし4は在学時にもほとんどフルタイムに近い時間、法定最低賃金で働いてきたアルバイトの仕事からもう少し有利で安定した正社員に変わろうとハローワークを利用したものの、「ほとんど探しても、高卒以上とか18歳以上とかなんで」見つけられなかったという。5も中退後、ハローワークを2・3回訪れたが、結局見つかった仕事は別の手段だった。

また仕事を探すに当たって、中退した学校から仕事を紹介されたり、何らかの支援を受けた者は、面接調査で語られた範囲では見当たらなかった。

中退者の多くが求職手段として頼っているのは、一つは家族や友人・知人等の私的ネットワーク、もう一つは求人情報誌や折り込みチラシ・携帯電話の求人サイト・張り紙広告などである。

私的ネットワークでは親などの親族や中学校・高校などの友人・先輩、あるいは出入りしていた飲食店の店長などの知人であった。

6は母親の知人を通して建設会社に就職した。7は中退後、就労していない期間が続いたが、祖父の勧めでアルバイトを始めている。「おじいちゃんが『募集してるよ』って言って『じゃあ行ってみるわ』みたいな」

中学時代や高校の友人・先輩などの誘いや紹介は多い。

8は現在働いている工場でのアルバイトは「(中学時代の)一個上の先輩が働いていて、紹介みたいな」ということだった。ちなみに8は中学時代から仲がよかった遊び仲間の中には中卒や

高校中退して働いている者が少なくないという。

〔9〕は中退後、正社員として働き始めるまでに1年ほど2つのアルバイトをしたが、初めのファーストフードチェーンは「いとこがそこでバイトしてて」、次の「八百屋は(中学の)先輩がそこでやってて、手伝えみたいな」ということだった。

〔10〕は中退後半年ほど遊んでいたが、既に建設業で働いていた友人から誘われたのが現職に就ききっかけだったという。「急に電話かかってきて、『なに?』っていったら『おまえ働け』って。『あ、強制?』っていったら、『うん、強制』って。強制的に入れられましたね。」

〔11〕は在学中からのコンビニの仕事を中退後も続けているが、その仕事を始めたきっかけは「(中学の同級の友達)みんなでしょうって言って、みんなで受かって」ということだった。今でも一緒に働いている友達が何人かいるという。

〔12〕は友人に誘われて在学中から始めた飲食店のアルバイトを3年あまり続けている。一緒に働いているのも地元の友人同士が多い。

こうした友人・先輩などのネットワークは、比較的男性に多く見られ、〔8〕、〔9〕や〔12〕のように中学時代や高校入学後にやや「逸脱傾向」のある友人グループに属していた者が多い。こうしたグループは、一方では遊びなど怠学・退学への誘因になるとともに、他方で仕事を紹介しあうなどのネットワークとしても働いているように見受けられる。

また仕事の中で作られた知り合い関係が、その後の転職などに役立っている例もあった。塗装業正社員で働く〔13〕は、ほぼ同じ職種で二度ほどの転職をしているが、ともに同じ現場で働いて知り合ったつてが役立っていた。

また求人情報誌や折り込みチラシ・携帯電話の求人サイト・張り紙広告などを利用する者たちも少なくない。

〔14〕は仕事探しは「全部、アルバイト情報サイトAという携帯の、それですね」という。「電話するのが嫌なんですよ……なんか人見知りもあって、どっから話したらいいかわからないっていう。でアルバイト携帯サイトAだと、メールで応募ができるんですね。」

〔15〕は新聞折り込みの求人情報を見た後、「その店まで行って張り紙があったんです。だからその店に入って。店長にいった」という形で今の仕事に就いた。

こうした情報手段、特に携帯電話の求人サイトなどは〔14〕の発言にも見られるように、便利であるだけでなく、電話では気後れを感じることも多いと思われる若年中退者にとっては、最初の応募をメールなどで行えるということも、多く利用される要因の一つとなっているようである。しかし一方で、正社員などの安定した仕事に就けている者の多くは、これらの情報手段よりも私的ネットワークに頼っている。これは高卒資格を持っていなかったり、18歳に達していない中退者にとっては、正社員など安定した仕事の求人が数・種類ともに限られていて、かつこれらの情報が求人情報誌や折り込みチラシ・携帯電話の求人サイト・張り紙広告などの情報手段やハローワークなどで公開されているものの中から見つけることが困難であることが背景にあると思われる。逆にいえば、主にアルバイト・パートなどの仕事を探す手段としてウェブサイトや求人情報誌などが頼りにされているともいえる。一方で、実際に今回面接調査の対象となった中退者が比較的多く正社員として就労している建設関係等では、小零細企業が多くを占めていることなども相まって、募集をこうした私的ネットワークに頼るところが多いこともあるかもしれない。

(2) 就業への制約

正社員などを希望しながらもなかなかそれにたどり着けない者は多い。その際、学歴や年

年齢などが制約になっていると感じている者も少なくない。

16は中退後にいくつかのアルバイトを時には収入を確保するため掛け持ちで経験した上で、現在は派遣で工場に勤めている。「派遣なんで……結局学歴なんかも関係ないんで、（採用面接の時は）そんなにあんまりいわれなかったです。」「時給が普通のバイトとか選ぶよりはちょっと高いんで」とはいうものの、繁閑によって働く時間に変動がある。「暇になってきたら、ちょっと給料的にもやっぱり変わりたいっていうのはあるんで。でもまだ忙しいんで」という。

17は中退後にアルバイトから正社員に移りたくて、「仕事を探したんですけど、面接したんですけど、落ちちゃって」という。こうした体験から高卒学歴がなくて18歳未満では仕事を移るのは無理だ、「ちゃんと就職はしなきゃいけないなと思ってたんですけど、とりあえずは18になんないと動けないなあ」と思っているという。

また正社員などではなく、アルバイトの仕事を探すのにもいろいろな苦勞をしている者は多い。

18は「（9月に高校を）辞めて、いろいろ何件かアルバイト受けて、で落ちて、で12月に決まったんです」という。

また19も中退後最初のアルバイトは「落ちて、落ちて、落ちて、受かったり」と、決まるまでかなり時間がかかったという。

20も「アルバイトを探していると、求人情報誌に『高卒以上』と書いてあるじゃないですか。いらっとします」という。

中退という経歴が影響することもある。21はこれまでにアルバイトの採用面接を何度も受けた経験がある。店などによっては中退理由などについて「面接ですごく細かく聞かれる所はたいてい落とされてきたので」という。

また地域によってはアルバイト就労の機会すら限られていて容易に見つからない。現在未就労の22は、アルバイトの仕事の多いところまでは「片道1000円掛かるんで、近くじゃないとダメと」、通える範囲を「自分の足で」、8か月ほど探しているが未だに見つからない。「チラシとか見たりパート募集みたいなの見ても、行こうかなとは思ったんですけど……女性限定とか書いてあったり」「ほかにはコンビニだったら夜とかが募集が多いんで。まだそのとき17だったんで、「どうかな？」みたいな感じがあったんで」「年齢も気にはしてましたね。18歳とか書いてあったりもしますし」という。

このように都市部以外の地域では、特に若年者は交通手段や交通費などの制約が重なってアルバイト就労さえ困難な場合もある。

（3）転職・離職

アルバイト・正社員に限らず、比較的長期にわたって一つの仕事に定着している者もいるが、多くは何度もの離職・転職を経験している。その中には解雇や雇い止めなど、自己都合以外の離職ケースもかなりある。

たとえば23は、現在の食品製造・販売の仕事を在学中から1年以上続けてきたが、勤めていた店舗が「もう今月でなくなるんで」「別の仕事を探さないといけないんですよ」という。

24は同じように在学中から続けてきたアルバイトの仕事が、店舗閉鎖によって面接調査直前になくなってしまった。「12月に閉店になっちゃったんですよ。ずっと続けていきたくったんですけど……それが11月半ばぐらいに店長からいわれて。すごい大好きだったんですけど、ずーっとやってて。」

25も半年ほど働いていたラーメン屋が、「お店が潰れてしまったんで」離職している。

また形の上では自己都合と見られる者でも、やむを得ぬ離職・転職ケースが多い。

26は働いていた店舗が閉鎖になった。「少し離れた違う店舗に私だけ異動になって、通うのも交通手段があまりよくないところだったので、それで別の仕事を探して」という。次に見つけたコンビニの仕事は「出勤日数があまりにも少なく」て収入が確保できないため、また別の仕事を探した。その後、テレホンアポインターの仕事を見つけたが、「週ごとに、アポイントが取れた人だけ出勤が増えて、あまり取れない人は1日ずつ週ごとに減らされていくところだったので」、出勤日数を減らされて辞めることになったという。

27は転職を経験しており、初めのものは「仕事がなくなってきて休みがちになって……生活できねえと辞めさせてもらって」。二つ目も途中から「結局仕事がなくなって月に10日出れず……それもきついと辞めさせてもらって」という。

28はアルバイトで働いていた飲食店チェーンで、男性アルバイトからつきあいを求められて断ったことから陰口を言われるようになり、居づらくなって辞めたという。

また離転職が多い背景には、労働条件の悪さ、特に労働基準法などの最低限の基準すら守られていないなどがある。

29が就いた深夜営業の飲食店の仕事では、「店舗の掃除とか、開店前の下準備とか。最初は1店舗だけで働いていたが、その後に本店も加えて2店舗で働くことになった。」「人使いが荒いところで、前働いていた人も辞めちゃって、1人でほとんど2店舗を掃除したりとか、準備してたりとかしてたので。」そうした状況に気づいた親のアドバイスもあり、この仕事を辞めたという。

30は「交通費を出すっていったのに出なかったところとかも、給料見たら」と、採用時に示された条件と実際に支払われた賃金等が異なっていたことが理由で辞めた仕事があるという。

31がアルバイトで働いているところは、初めは「8時～5時で終わるし、土曜日もないよみたいな感じ」でいわれていたが、実際には毎日の労働時間が10時間、2週に1回は土曜も出勤で、しかも超過割増給などはないという。

このように調査対象者たちが働く就労環境には様々な問題点が見受けられた。廃業や店舗閉鎖などによる離職など明らかに自己都合ではないものばかりでなく、採用時の条件や最低限の労働条件すら守られていない、予測していた時間数働けず収入が確保できないなど、不本意な離職をしているケースが多い。特に労働時間の確保という点では、アルバイトについては採用時に明確な勤務日数等を明示せず、週ごとや月ごとに勤務時間を割り振っていくいわゆる“シフト制”が用いられていることが多い。しかしこれは雇用する側の裁量権が大きく、働く側にとっては労働時間や収入の予測がつきづらく、家計を補助するための就業でない限り、働きづらい仕組みとなる場合がある。中退就労者の多くがまだ親元などで暮らしているとはいえ、本人も家族も一定の収入をあてにしている場合は少ない。そういう点から見て、アルバイトは賃金水準の低さだけでなく、様々な不安定さを強いているといえる。

中退者の多くに見られる頻繁な離転職は、ときとして彼らの就労意識の低さや根気のなさなどと見られることもあるが、このような就労条件そのものの不安定さに起因する部分が多いことに留意すべきであろう。

(4) 安定した就労と成長感覚

このように就労する中退者の多くが不安定な状態の下にいるが、少数とはいえ比較的安定した就労にたどり着いている者もいる。面接調査時点で正社員として働いていた者は3人、それに1人が契約社員で将来社員登用の可能性を約束されている。そのほか、現在は受験準備などを行っているも

の一時正社員等で働いた経験がある者が2人いた。全て男性である。

調査票調査では、現在正社員として働いている者のジェンダー別割合では、男性が81.4%と男性に大きく偏っていたが、面接調査もこうした傾向にほぼ重なる。また調査票調査の意識に関する諸項目を総合的に見ると、現状別では正社員で働いている者たちのグループが最も肯定的であった。例えば、将来への不安感が最も低く、また「友だちから悩みを打ち明けられることが多い」「嫌いな人・苦手な人とも、うまくつきあえる」「自分の考えをはっきり相手に伝えることができる」「仲間から信頼されている」「自分は人よりすぐれたところがある」「うまくいかないことにも意欲的に取り組む」「将来の目標がある」など自分に対する自信感なども、おしなべて他グループに比べ高かった。一方、全日制・定時制高校や通信制高校など就学中の者たちのグループは、専門学校在学者を除いて将来への不安感が他グループよりも高く、また「友だちから悩みを打ち明けられることが多い」などの自分に対する自信では、全日制・定時制高校在籍者でおおよそ全体の平均程度、通信制高校在籍者ではかなり平均よりも低い傾向にあった。なお、フリーター・パートなどで働いている者たちのグループは、不安感、自分に対する自信ともほとんどの項目でおおよそ平均程度であった。

正社員就労者は、調査票調査でも退学時見通しで「正社員として働くつもりだった」者の4割程度にすぎず、今回の面接調査を見ると希望してもなかなかたどり着けない者が多い上にジェンダー差が大きいことがうかがえる。しかし現状別に見た場合、正社員就労者はこのように、意識の上では最も肯定的な状態にあることが認められる。なぜ正社員で働く者たちの意識が他に比べこのように肯定的なのか、ここではそのことを念頭に置きながら、正社員等を中心に、比較的安定した働き方をしている者たちの状況を見てみたい。

ただ検討に入る前に、建設関係の仕事について一言触れておく。正社員で現在働いていたり働いたことのある者には、塗装や鳶などの建設関係の仕事が多いことが一つの特徴である。以前から建設関係の職種は学歴に関わりなく入職でき、体力が物を言う部分が多いということから、中学校卒業者や高校中退者が多く就くものであったが、現在でもそうした状況が一定続いていることがわかる。平成19年「就業構造調査」では、15-19歳・中卒学歴・正規就業者男性の約5割を建設業が占めている。ちなみに15-19歳・中卒学歴・正規就業者に占める男性割合は約8割である。ただし建設分野の就労形態はやや特異で、ある対象者の面接調査中の以下の発言にもあるように、実質的には親方に雇われ雇用の関係にあっても、形式上は「自営」で、賃金支払いの方式も日給制、保険等は自前というのが一般的である。また賃金計算も1日1人標準時間を一人工として計算され、超過勤務については人工数とその分上乘せされるというやり方で計算されることが多い。

「個人ですね、名目上自営業。だから申告とかも全部自分でやりなさいよっていう。」「一応社長がいるんですよ。傍から見れば社員なんですけど、保険だとかそういうのが全くないんで、入るのであれば自分で」「(賃金計算は)一人工いくらという計算で」

これは「アルバイト」であっても同様であり、アルバイトなのか社員なのかをはっきりとした基準で分けることが難しい。ただ現在働いている3人とこれまでに働いたことのある1人については、それぞれ一定の経験を積み周りの職人からもある程度認められはじめ、賃金もある程度の水準まで上がっており、また自分でも(いったんは)その仕事に定着しつつあるという感覚を持っているということから、正社員とした。建設関係は上述のように男性の中退者等にとって比較的接近しやすい職種であるとともに、以下に触れるように実務経験を基に資格取得することによって一人前になっていくことから、いったん定着した場合、その先のキャリアルートや目標が比較的見えやすい領域でもある。とはいえ職種にもよるが一人前になるには3~5年程度は必要とされる。

正社員など同じ仕事で働き続けている者たちの中に見られる第一は、働く中で得られる自分の成長感覚であろう。

鳶で働く[32]は、働いていて「新しいこと覚えるのが面白いです。足場あげる手順とか」という。親方は「あとは自分でやってみて覚えろ」という感じで、それほど丁寧に最初から教えてくれるわけではないが、やっていて「褒められたときとか」に自分の成長が感じられるという。

塗装業で働く[33]は、最近「(1人で)現場まかしてもらったりもしているので」「ある程度できるようにはなっている」感じだという。また働いていてやりがいを感じるのは「仕事が終わったとき、きれいになったなあとか、まったく印象が変わっているのだ」と。

また同じ塗装業の[34]は、だいたい自分でやれるなと思えたのは、「(2年過ぎた)最近になってじゃないですかね」と。「でも、1人前っていったら10年以上とかですね」ともいっていた。

[35]は初めは店長に厳しく怒られて、年上のパートさんに慰められたりしていたが、「やっていくうちにだんだん下の人も入ってくるんですよ、新しい人が。そういう人とも仲良く仕事をしたりして」続けられるようになった。ここのシステムではアルバイト・パートにも段階別の賃金が設定されていて、次第に上に上がっていくことも自信につながったようだ。

こうした経験が体感できたり、あるいは周りと共に共有されることが、働いていて自分が確実に成長しているという感覚や、それを基にした自分への自信をもたらすのであろう。

第二に、職場などにおける年上など異年齢の人たちとの縦や斜めの関係である。

[33]は今よく一緒に働いている年上の職人が一番頼りになるという。その人は「話分かってくれてしっかりと教えてくれます」。

[32]は仕事のあと社長や20代後半の先輩によく「飯とか連れてってもらったり」している。一緒に遊びに行ったり、大型電気店への買い物に誘われたりもする。困ったことがあったときに一番相談できるのも社長で、彼女とのつきあいで親に相談しづらいことでも相談にのってもらったという。また先輩の働き方やスキルについては「それは違います」と、自分との間の経験の差をはっきり意識している。

同じアルバイトを2年あまり続けてきた[36]は、働き始めて間がない頃、商品を消毒した手で扱っているのに、お客さんに「汚い」といわれてひどく傷ついた。「わーとか思って何も言えずにただ。その人がいなくなった後に、後のそのパートのおばさんが、『嫌ねえ』って、励ましてくれるつもりだったと思うんですけど……見てくれたんだとか思って」と、年上のパートさんに助けられたことを話してくれた。

前述の成長感覚などもそうした縦や斜めの関係を通して得られていることが多い。学校においても教員など大人との縦の関係はあるが、特に高校ではほとんどの生活が同一年齢集団であることから、特に年上の同僚などのような斜めの関係は少ない。学校の持つこうした環境については、留年・再入学などして年下の学年に加わったことのある者たちの中から、周りの同級生らとなじめないという声が多く聞かれたことなどにも表れている。これに対して[32]や[33]に見られるような年上の同僚は、この仕事をあと何年続ければあの程度の仕事ができるようになるなど自分の成長目標になったりモデルになるばかりでなく、私生活の上でもいろんな相談相手になるなど、人生のちょっと先輩という役割を果たしている。また職場というところは初めから異年齢であることが当たり前であることから、[35]のように年下の同僚が入ってきても、違和感なく関係が作りやすい。さらに親方なども、縦の関係といいつつも学校教師とは異なり、将来の独立などをイメージした仕事モデルにもなっている。

第三は将来展望のイメージという点である。正社員等で働く者たちのほとんどが、多かれ少なか

れ具体的な将来展望を持っていた。

32は「30 くらいになったら、自分で会社やるかって感じです」という。こう思ったのは、現場で一緒になる職人たちから「この仕事やったら、現場の雑用みたいなおじいちゃんになるまでやるか、自分が社長になって会社大きくしていくかどっちかだっていわれました」からだという。当面は玉掛け（クレーン操作資格）や足場組立、職長などの資格を取りたいというのが目標だ。不安については、「将来についてはあんまりない」という。

33は将来展望について以下のように語っていた。「塗装業である程度一人でできるようになるのは3年と言われているんです。20代前半でうまくいってれば独立して、子どもが生まれたり人より早く進んでいるんで、家も買っちゃおうと。」

当面の不安は「今の会社にいる限り」ないという。もし今の会社で仕事がなくなったら、「そうになったら知り合いの一人親方やっている人たちに頼もうかって。なんかあったらおいでって言ってくれている人もいるんで、困ったら助けてくれるかな」とのことだった。

34は今「仕事変える気もない」、塗装の一級技能士資格を取ることが目標という。「1人前っていったら10年以上」という先ほどの発言は、実務経験7年が受験資格というこの資格を念頭に置いたものであろう。資格を取るために学校に行くなどは「絶対しない、と思いますね。学校行っても、仕事しているのと基礎練習から始めるのと一緒だから、どうせだったら金稼ぎながら覚えた方がたぶん都合いいし」とのことだった。

37は小売店チェーンにアルバイトで入った後、半年ほどして契約社員となっている。高卒資格が取れたらそのまま社員登用してもらえるとされている。最初に採用されたときの店長が、他店舗に異動してしまった今も相談相手になっている。「目標はあります。目標っていうか、幹部になりたい。……（専務まで）行きたいなあというのが野望です。っていうのを前の店長が言っていたんですけど、パクリです。そういう気持ちでやりな、上にあがる気持ちでやりなっていわれたから。」「今はそんなに不安はないかな」という。その理由は「社員さんの話や親戚の話聞いて、ゼロじゃないけど不安がなくなったなあ」と。

38は「今のファーストフードチェーンAのバイトで、社員登用制度があるっぽいんで、将来いつか就職したいなと思ってます」という。既に2年半同じところで働いており、アルバイトでのランクも上から2番目まで到達している。一緒に働いている社員の一人も、大学を中退した後アルバイトから社員登用された経歴を持っているとことで、彼女にとってのモデルになっているようだ。

他方で同じように長い期間就労を続けていても、不安定なアルバイト等をつぎはぎで続けた場合は、だいぶ状況が異なる。

39は、現在の不安を次のように語っている。

「正直、このまま自分が正社員とかで働けるっていう感じがあまりしないのと、もしそうなら、やっぱり結婚とかそういうのに……恋人とかがそんなに続いたりするんだろうかっていう、のもあったり、やっぱり20歳とかになって、年金とかそういうもの払っていけるんだろうか？って考えると、やっぱりどうしても不安ですね。」

39の就労経験は通算すれば2年前後になるが、それが自分への自信や将来展望には容易に結びつかないようだ。

このように比較的安定した就労を続けており、かつその仕事や職場に一定の見通しが得られる者である場合、そこでの成長感覚は自分への自信を伴って将来展望に結びついている。建設関係の仕事では、一つの職種に一定期間定着することで専門的スキルに沿って経験や成長感が蓄積されていくとともに、次のスキル水準や資格目標などが見えやすくなる。また縦や斜めの関係を通して、3年後、

5年後、10年後などのイメージと目標も見えやすくなるのが、将来への不安感を低くしたり、自分への自信を高めていくことにつながっているのであろう。同じようなことは小売り・飲食などで働く[37]や[38]にもいえる。アルバイトなどであっても、同じ仕事を続けていくことで自分の成長感や自信が少しずつ高まるとともに、職場の中での縦や斜めの関係の中に自分にとってのモデルとなる存在が見つかっている。ただし[37]、[38]はそれぞれ社員登用のある職場であり、このように同じ職場の中に自分にとってのモデルや将来像を見いだせる環境が、アルバイト就労の中では必ずしも多いとはいえない。特に不安定で断続的な就労経験であると、同僚関係もつくりづらく、成長感覚さ得にくいものとなっている。

中退者にとって安定的な就労場所を得ることが容易でないとはいいいながらも、ここに見られた、就労経験の中で得られる成長感覚や異年齢との縦や斜めの関係などは、いったん、学校からは離れたことで自信を失いがちな中退者にとっては、重要なものである。その多くが、学校の中では得づらいものでもある。前述のような調査票調査結果からも、高校に再び戻った者たちが将来への不安感が高かったり、自分への自信を高められきれないでいる中で、こうした要素がどう保障されるかは重要であろう。

2 現在無業の者たち

面接調査時に就学も就業もしていなかった者は男性3名、女性1名（育児中を除く）だった。ここでは以上の4人を取り上げる。調査票調査に見られる意識状況では、「特に何もしていない」と答えた者たちは、将来への不安は平均程度だったが、「友だちから悩みを打ち明けられることが多い」などの自分への自信はおしなべて平均よりも低く、特に「うまくいかないことにも意欲的に取り組む」は他グループを大きく下回っていた。さらに「友達から仲間はずれにされた」について肯定している者が25%ほどで、他グループよりかなり高くなっていて。また「仕事を探している」と答えた者たちは、将来への不安感が高校在学者などと同様高く、「友だちから悩みを打ち明けられることが多い」などの自分への自信は項目によるばらつきはあるものの平均程度かそれよりも低かった。いずれのグループも調査票調査に見られる意識では否定的傾向を示している。こうした調査票調査の結果と重ねながら、この4人について検討をしてみたい。

第一に4人のうちの多くが、身体的又は精神的疾患を抱えていることである。

[40]はいまは「ずっとひきこもりで、あんまり外出するのが怖くて家にいます。……自分の部屋ですね」という。小学校、中学校とそれぞれいじめられた体験があった。助けてもらえなかったという。中学の時は「学校は毎日行っていたんですけど、友達とか会うのが怖くて」ということだった。日常的に話す相手は母親だけで、家族以外は会いたくないと辛い状態にいる。今の不安については、「全て。抱えきれないほど。全て不安だらけ」という。

[41]は中退後、まだほとんど働いた経験がなく、現在アルバイトの仕事を探している。高校在学中「自分が思ったのと違ってたっていうのが一番大きかったですね。どんどんどんどんもうモチベーションが下がってって、顔出せなくなったりして、結局10月くらいに一番うつになった」という。

このように疾患を抱えて日常生活の範囲も狭くなっていることや、とりわけ[43]、[44]のような抑うつ症状を抱えたり経験していることは、このグループで自分に対する自信が低下していることと関係していよう。

第二に、こうした疾患とは別の理由で無業状態にある者もいる。

[42]は中退後はまだ就労経験がない。通える範囲になかなかアルバイトの仕事がないこともある。現在、友人に仕事の紹介を頼んでいる。両親が働いているため、食事を作るなどの家事や幼い弟の「べ

ピーシッター」をしているという。ただ「中学生の頃は学校全体が敵で……友達感情も抱けない」というようなひどいじめにあって、フリースクールに通っていた経験がある。こうした体験も、就労に踏み出せない一つの背景かもしれない。

43は中退後に半年近く飲食店でのアルバイトをした経験があるものの、現在は無業。日常的には一人で外出し、町で時間をつぶすことが多いという。親に促されて専門学校の見学に行くなどもしているが、まだこれからの方向性を定めあぐねているように見える。

このように見ると無業の者たちも、ただ原因や理由もなく無気力や怠惰に過ごしているわけではない。むしろ病気を抱えたり、あるいは在学中の何らかの体験を背景とした精神的困難を抱えるなどしている者が多い。また43含め、同世代の交友関係が限られていて希薄なことも共通している。こういう交友関係の少なさは、不活発な状態の結果でもあるが、他方でその生活範囲がなかなか広がっていかない原因にもなっているように思われる。

3 友人関係

本項以降では、本章冒頭に述べた就労中及び無業の者合わせて26人を対象として検討する。10代後半の若者たちにとって、在学しているか否かにかかわらず、同世代の友人関係はその生活の中で大きな比重を占めている。ただ中退者の場合、高校以前からどのような友人関係を持っていたか、中退に至る経緯、中退後の生活スタイルなどによって、現在の友人関係やつきあい方に一定の違いが生まれているように見える。

例えば深刻ないじめや、あるいは学校の勉強などについて行けないことを過大に受けとめての不登校を背景に持つケースでは、日常的な友人とのつきあいを持てていない者が多い。本稿で扱っているケースでは2で触れた40、41、42などがそれに該当する。

ただし中退後の友人関係を見ると、中退後に新たにつくられた友人関係が今の友人関係の中心にあるというケースは必ずしも多くはない。新しく作られた友人関係が比較的太い関係になっていると見られるのは、現在のアルバイト仲間とよく遊びに行くという44など少数に限られる。ただし、44は中退前の高校の同級生たちとの関係も依然として続いている。

以前の同級生らが遊び仲間であるだけでなく、仕事を紹介しあうなど幅広いソーシャルネットワークとしての役割を果たしている例は、1(1)にも触れた通りである。一方で、就労している者たちの中には、まだ在学中の元同級生たちとは、時間が合わずつきあいが減ったり途絶えたというケースもある。

このように中退者の多くは、中学時代や中退した高校でつくられた友人関係・仲間関係がいまだその中心にある。中退後の同世代関係が、自宅にいたことの多い無業者ばかりでなく就労している者たちにおいても、必ずしも新たに広がっていかないのには、いくつかの理由があるだろう。一つは就労しているといっても、多くの者がアルバイトなど不安定で継続性の薄い仕事に就いていることである。そのため、働いていてもそこで安定した友人関係や仲間関係が生まれにくいということがある。もう一つは職場がある程度安定していても、とくに正社員で働く者たちなどの場合、企業規模は数人と小さく、同世代の同僚などとの出会いが限られていることだろう。安定した職場では、1(4)に見たように縦や斜めの異年齢関係という、別の要素によって補われていることは軽視できないとしても、同世代の友人関係・仲間関係という、この年代の若者たちに共通の重要な要素が全般的に薄くなりがちであるということは、中退者の問題を考える上で一つの重要なポイントであろう。

4 学校への復帰の希望

本稿で扱っている者 27 人のうち 18 人は、現在は就学や受験準備などはしていない。しかしその中にも学校への復帰を希望し、また既にそのための行動を起こしているケースがいくつかある。1 月末から 2 月の面接調査時点で既に 4 月からの再入学に向けて学校との連絡を取ったり願書を提出していたものが 4 人（定時制高校 3、通信制高校 1）いた。1 人は高卒認定試験に合格し 4 月から専門学校への入学が決まっていた。また 1 人は高卒認定試験に合格し大学受験中だった。

ここでは、卒業後の進路希望などに着目しながら、高校になぜ戻ろうとしているのかという動機について考察してみたい。編入学・再入学などで高校に戻ろうとしている者たちのそれぞれの様子は次の通りである。卒業後の進路希望では、四年制大学はならず、2 人が実務・資格系の短大を志望し、あとの 2 人は就職を考えている。

[45]は前の学校を辞める頃から次の学校を探していたが、「お金が集められなくて、母の手も借りたくないし、借りれないし」ということですのですぐには入れず、今になったという。外国語を学ぶことに興味がある。「（当初は）高校卒業したら、語学部のある大学行って、それから何か職に就こうと思ってたんですけど、（最近）通信（制高校）卒業するまでに、語学の検定で資格ちゃんと取って、で、通信（制高校）卒業する時にその語学関連の職業に就こうと思ってるんですよ。」

[46]は専門学科を中退しているが、在学中の実習で「船運転するのが楽しいなと思ったんで」という。そのため航海士の資格が取れる短期大学校を目指して高校編入学を考えている。「（辞める時に）前の高校で、担任の先生とか校長先生に約束したんで」とのことだった。

[47]は一度中退した同じ高校に再び戻ることにしている。前の高校の通信制への再入学を「先生たちに相談したらおいでって、喜んでくれて」。高校を卒業したら就職したいと思っている。「やっぱり学校、卒業する時就職したいっていったら、探してもらえないかなって。」

[48]は定時制高校への編入学を考えて願書を出している。看護か保育の短大に進みたいという。

また現在就労中の者のうちには合わせて通信制高校に在籍している者が 6 人いたが、その卒業後の希望では大学と専門学校への進学が 1 人ずつ、就職を希望又は決定が 3 人、学歴に関係のない技能研修を考えている者が 1 人だった。これに対して就労をせずに通信制高校に在籍していたり塾・予備校等での受験準備をしている者（ただし育児中の者を除く）7 人の進路希望とでは 4 人が大学、2 人が専門学校進学を希望しており、進学を考えていない者は 1 人だけだった。

ただ、学校に戻ろうとするとき、学費などが制約になっている者もいる。

[45]は上述のように、前の学校を中退後すぐに通信制への編入を考えたが、学費が用意できないため、半年間アルバイトをしながら過ごしていた。

[49]は最近高校に再入学しようかと思うようになった。ただ「考えて探したんですけど、やっぱりお金がかかっちゃたりが多くて」という。

以上からは、就労・無業の者たちの中では、高校に戻る動機として、必ずしもその後の進学を希望している者が多くを占めるわけではなく、就職するためにも高卒資格を取りたいというような動機の者が多いこと、逆に就労することなく再び高校に戻ったり、あるいは塾・予備校や自宅などで高卒認定試験受験を目指している者の中には、大学などへの進学を当初から目指している者が多いという傾向が読み取れる。就労・無業の者たちの中退前の高校のタイプについては冒頭に触れたとおりであるが、これにはこの者たちの中学までに到達していた学力水準とともに、家庭状況なども反映していると思われる。就労動機は必ずしも経済的理由だけではないとはいえ、家庭の経済状況なども反映していると考えられる。しかし本稿 1（1）でも見たように、高卒資格がないことが就労上の制約と感じている者は少なくなかった。調査票調査でも、「現在仕事を探している」中で現在正社員を除いた 155 人

について再分析すると、高卒資格の必要性は、中退前（「必要」（74.2%））から中退後（81.9%）へと有意に高まっていた（ちなみに「正社員」では中退前でも65.5%と低かったが中退後には61.1%とさらに下がる傾向にある）。仕事が見つからなかったり不安定な仕事からなかなか抜け出せず、改めて高卒資格の必要を感じたことがこれらの者たちの中で、高校に戻ろうとする有力な動機の一つとなっていると考えられる。ただし[45]や[49]のように、経済的制約が学校に戻るにあたっての困難になっている者も少なくない。一方で大学等への進学を目指すものの中では、高校への再入学・編入学よりはむしろ高卒認定試験を利用している者が多かった。

5 18歳などの節目

調査票調査の分析からは、将来への不安感や高卒資格の必要性という点で、18歳という年齢が何らかの節目をつくっているのではないかということが指摘されていた（内閣府「若者の意識に関する調査（高等学校中途退学者の意識に関する調査）報告書」（平成23年3月）中の「支援ニーズの特徴」）。18歳や20歳という年齢の節目を意識したという発言は面接調査においても多く見られた。ここではそのような発言に注目しながらその意味について検討したい。

第一に18歳や20歳という年齢の節目を自分の振る舞いや態度への自覚として意識した発言である。

[50]は中退以来いくつかのアルバイトを続けてきたが、あるとき「人に甘えているうちは学生と変わらないかなって思って」、それから人に頼らなくなったという。「同じ年の子たちが高校卒業する頃だから、私もちゃんとしなきゃって意識はより強くなって。」

[51]は在学時からのアルバイトを数年続けてきた。スタッフの中心として頼りにもされているが、別に目指したい職がある。「早く行動に移さないと、もうすぐ20歳なので」という。「周りからけっこう言われることは、なかなか行動に出れないんで、ちょっとそろそろやらないと本当にまずいかな」と。

家業を手伝いながら大学受験中の[5]は、不登校で中退した後、自宅で何もしない状態で休んでいたが、予備校に通い出すきっかけを次のように語っていた。

「この年に僕の同級生は大学に入学したりしているんですね。このとき僕はこのシーズン受験もできずに……不登校で学校に行かなきゃとかそういうのグチャグチャしてたのからようやく解放されて一息ついているような時期。でもはって気づくと同級生たちは大学に進んだり、もう次のステップに足を踏む出している。それでやっぱり大学に行きたいというか、行かなきゃという思いで予備校に入学したはいいいんですけど。」

また本稿の対象から外れているが大学受験中の[53]は、それまでの仕事を辞めて予備校に通い始めたきっかけを次のように語っている。

「（高卒認定を）いつかはほしいとは思っていたんですけど、働いているうちはお金が入ってくるの楽しいじゃないですか。それで別にそこまで意識はしていなかったですね。自分が18になって、まわりの子が大学受験だとかいう話を聞いて、改めて実感したというか。」

このように、18歳や20歳という節目を意識したことは、ある自覚を生んだり、あるいは次の行動にむかおうとするきっかけを与えている。その際、[50]、[52]、[53]のように、高校時代の同級生たちが卒業を迎え、進学や就職に踏み出そうとしていることが、自分も遅れまいというような形で、その節目を意識させることが多い。そのような点を踏まえれば、中退者への支援的アプローチの契機として、このような年齢的節目を意識した取組が考えられてよからう。

第二にこうした同級生たちなどを意識することは、そこでの進路選択などに強い影響を与えてい

る。

55は中退後アルバイトを続けつつ高卒認定試験に合格し、春からの専門学校入学が決まっている。「個人的には、まわりとずれて専門行ってしまうのが嫌だったんですよ。学年がずれて、私が入学する頃には一個下の子と一緒に入学したいな、そういうのが嫌だったんで、1年で高卒認定試験は合格しなきゃって思っていたんで。」

56は短大進学を目指しているが、その理由の一つを次のように語っている。「短大行けば、同級生たちとも一緒の時期に卒業になるのかな。2年遅れてです。普通の4年間の人たちと、あと2年頑張れば、普通の人たちのところに戻れるっていう考えもありますし。」

年齢は節目としてばかりではなく、高校の同級生ら“普通の人たち”の歩みにどこかで追いつきたい、という意識とも結びついている。そしてこうした遅れまい、追いつきたいという意識は、だから頑張ろうという積極的な行動を促す原動力になる面があるとともに、場合によっては無理を強いて新たな挫折に結びつくこともある。追いつきたいという意識の背後には、高校までの学校生活の中にあつた同一年齢規範が強くと考えられる。1(4)に見た異年齢であることが当たり前の就労の場と比べたときに、こうした規範意識が、様々に中退者たちを苦しめている側面もあるのではなかろうか。

第三は、就労条件との関係で18歳が意識される場合である。1(2)でも触れたが、若年中退者が仕事に就こうとするとき、高卒資格がないこととともに18歳未満であることが制約になることも多い。前出1(2)17の「とりあえずは18になんないと動けないなあ」や、1(2)22「年齢も気にはしてましたね。18歳とか書いてあったりもしますし」などの発言に見られたとおりである。

労働基準法(以下「労基法」という。)第57条では雇用主は満18歳未満を雇用する際には、年齢を証明する戸籍証明書が義務づけられ、また午後10時から午前5時までの深夜時間帯の就労を原則として禁じている。こうした労基法上の制限は年少者を保護する目的で、これ自体は必要な制限である。しかし、深夜まで営業する飲食店や24時間営業のコンビニなどでは、深夜時間帯にかかるシフトに入れられないなどの理由で18歳未満があまり歓迎されないことも少なくないように見受けられる。そうしたことの影響が、18歳未満の者にとって就業先を見つけることを困難にしていると考えられる。

6 将来への不安感

調査票調査では回答者のおよそ7割(69.6%)が将来への不安がある(「やや不安がある」「たいへん不安だ」の合計)と答えていた。その不安感の中味などについて面接調査から浮かび上がった点を見てみよう。ただし既に述べたように、現在の状況によって不安感の高さは異なっている。例えば調査票調査の結果で、正社員で働いている者たちのなかでは不安感が低かったが、それは1(4)の正社員で働く32、32や契約社員の38などに見たとおりであった。他方、同じ就労でもアルバイトで働いている者たちは全体平均よりはやや低いとはいえ正社員より高い不安感を、そして「特に何もしていない」者たちは平均程度、「仕事を探している」者たちはかなり高い不安感が調査票調査の結果では示されていた。それらの不安感とはどんなものだろうか。

現在の不安感について見る前に、ここではまず中退直後の不安について語られている部分について見てみたい。

57は身体的病気が原因で中退したが、その直後のことをこう語っている。「何ていえばいいのかな、その、学校に在籍していて行けなかったときは、クラスが気持ち悪いとか、学校にいるときに苦しいみたいと言っていたんですけど、でもなんだかんだっていったって学校は好きなんですよ。何ていえばいい

いんだろう、学校は好きだし、授業を受けるっていうのも好きだったんですよ。……辞めてからなんか、ある意味学校で守られてたんだなとも思って……実際こうパツてなくなると、自分が野ざらっというか、状態で、けっこう辛いんだなって思って。」

調査票調査では中退直後、「どうしたらいいのかわからなかった」と回答した者が1割弱(8.5%)いた。この1割弱を中心に、中退直後に学校から離れ、自分の所属がなくなってしまったことなどへの不安感をこのように感じた者は少なくないと考えられる。

ではその上で、現在中退者たちが感じている不安にはどのようなものがあるのだろうか。一つは、高校中退という経歴が、就職などに影響しないかという不安である。

[58]は中退後、アルバイトをしながら通信制高校に通い、専門学校を目指している。不安について、「学校中退っていうのあるじゃないですか。それがなんか、仕事に就くときにちょっと影響するかっていうのを考えちゃうんです」と言う。

二つ目は目指している仕事などに関わる不安である。

美容専門学校への入学が決まっている[59]は、これからについて次のように言う。「美容師って、厳しくて、割に合わないっていうか、朝から仕事で、深夜の終電まで働くのに、アシスタント、お店に入ってからが、16(万)とかだったり、けっこう仕事も厳しいし、すごい壁にぶち当たるし、みたいなすごい聞くんで、それはまあ不安っちゃ不安ですね。」

歌手を目指し少しずつ仕事が入るようになってきた[60]は、いろいろと不安を感じているという。「(いまもらえている仕事)それが急になくなったらどうしようとか。」「いま使ってもらっている方に嫌われたらどうしようとか。」また最近になって声帯を壊したことがある。「次声帯壊したら、手術で声出るけど歌うのは無理かもしれないって言われちゃった。その時一番不安でした」という。三つ目は、もう少し漠然とした将来への全般的不安である。

中退後、短期のアルバイトの後、仕事が見つからないでいる[61]は、将来への全般的不安感を次のように語っている。「結局歳とるにつれて結婚だったりも出てくれば、家庭持ったりとかすること考えたりも、将来的に考えるとけっこう量を働かなきゃいけないんで、それなりの仕事見つけるためには、それなりの資格だったり仕事だったり見つけなくちゃいけないんで。」

1(4)[39]が表明していた、正社員として働けるか、結婚したりすることがうまくできるかなども同様の全般的不安と言える。

一つ目の不安は、中退者の多くが多かれ少なかれ持っているものかもしれない。例え高校に再び戻って高卒資格を得たり、高卒認定試験などを経て上級学校に進学できても、履歴に中に中退ということが残っていることへの不安をどこかで感じる者は少なくないように思われる。これに対し、二つ目の仕事などに関わる具体的な不安が、現時点で既に一定の方向が自分の中で定まり、それに向けて歩み出そうとしている者の不安だとすれば、三つ目の不安はどちらかというはまだ方向性を十分に見つけられないでいる者たちの感じる不安であろう。自分が前に進んでいると感じられない、そんな不安感である。おそらくその最も強い現れの例が、2[40]の「全てが不安だらけ」の状態であろう。

中退後、人によっては様々な模索に一定の期間を費やさざるを得ない者たちもいる。10代というこれらの年齢を考えれば、そのような模索は許されてしかるべきであろう。その際、一定程度の不安は模索にとって必要だとしても、過度な不安感から身動きが取りづらい不活発状態になることは、模索そのものをも妨げることになる。そういう場合、何らかの支援が必要であろう。

7 支援への希望など

行政・学校・社会などからのどのような支援が必要かという点では、様々な課題が挙げられた。

第一は、仕事の紹介等についてである。

62は国などからほしい支援として、「辞めたときに、辞めてからもちゃんと働けるようにしてくれたいかなと思いますね。……（高校を辞めた）その人たちにちゃんとした就職先を見つけてあげられるとか」という発言があった。

63からは若者がもっと行きやすい職業紹介機関がほしいという声が聞かれた。「あと、若者が行きやすい場、結局今って、大人の人でも仕事ない人がほとんどで、そうやって職安とかいってやるかもしれないけど、その中に入りにくいし……若い人だけのそういう場とかもつくったら、絶対私は、友達誘ってとかでも行きやすいな。」

地域若者サポートステーション、ヤングハローワーク、ジョブカフェ等の若者に対応する機関が一定広がりつつあるとはいえ、これらが一層有効に機能することが必要であろう。また、中退者の就労への援助という点では、高校等の関与がもっと検討されるべきであろう。学校による職業紹介を認める職業安定法 27 条及び 33 条の 2 は、対象を卒業予定者に限っておらず、中退者にも職業紹介することが可能である。しかし 1 (1) にも触れたが、今回の面接調査の中で、中退時に就職についての何らかの援助を学校から受けたという者は皆無であった。卒業予定者向けの求人ですら不足している現在、中退者にまで紹介できないというような事情もあるかもしれない。しかし中退者に対してでも職業紹介がすることが可能であるということ自体について、まだ十分に学校側に意識されていないということもあるのではないか。

第二に、就業先の労働条件等に関してである。

国や社会に望むこととして 64からは、「一つ一つの店をちゃんと、給料とかもちゃんと、そこらへんの管理はちゃんとしたほうがいいのか。」という声が聞かれた。アルバイトを含め若年者の働く職場の多くに、就労時間の一部について賃金支払いをしなかったり、超過勤務割増や深夜割増を支払わない、休憩時間を与えない、予告手当なしの解雇、有給休暇を与えない等、何らかの労基法違反が見られる。こうした違法状態は、若年者の職場に限らず広がっている。今回の面接調査ではそうした違法被害を身内のアドバイスで労基署に訴え出ているケースが 1 件見られた。とはいえ年齢が若く社会経験が少ない上、多くが非正規雇用という何重にも弱者性を帯びる中退者にとって、周りからのアドバイスなどがないと、そのような行動はかなりハードルが高い。若年者にとって有効な相談・支援の窓口等が設置・周知される必要があろう。

第三に、同年代の仲間などと出会える場への希望である。

65はほかの中退者たちの体験が聞きたいと、次のように述べていた。「仲間との出会いはやっぱり、同じ学校辞めた、違う学校でも、人によって違う理由で辞めたり、家の事情とかで辞めてしまったりしたかもしれないし、そういう人たちと話をしたり……。やっぱり自分が学校辞めるっていうこと考えると、ほかの人、学校辞めた人の話とかも聞きたいなって。」

66からは働き始めの体験についての話が聞きたいという声があった。「『どういう風にすれば続くのか?』とか、例えば『何個か行った（数社で仕事を体験した）時に 6 個目とか 7 個目ぐらいでようやくこう続くようになったよ』とかそういう話もちよっとでも聞ければ嬉しいかなと思います」

ただこうした要求の強さは、中退に至るまでの経緯や置かれた状態などによって異なる。例えば中学時代の同級生や先輩などの中に中退者や中学校卒業後に就労している者がたくさんいるようなケースでは、既にそうした友人らからいろいろな体験を聞いており、必ずしも強い要求とはなっていない。しかしここでは扱っていない中退後、就労することなく塾や予備校などで高卒認定試験・大学受験準備などを行っている者たちなどに見られるものを含め、周りに中退などの経験をした友人・知人があまりいないケースでは、中退自体が未知の経験として本人に強い不安や孤立感をもたらしている。

そういうケースでは、同じような体験をした人の話を聞きたい、同じ経験者同士知り合いたいなどの要求が強い。地域若者サポートステーションの高校中退者へのアウトリーチ事業などでの取組が検討されてよいだろう。

第四に、職場体験などへの希望である。

66は「自分が働いて分かったのは、中退したとか卒業してもすぐですよ？慣れてないところで長く働くよりは、短い時間でもちょっとでも多く出て、1時間でも30分でも仕事ができるところがあるならばそういう経験ができるほうが、たぶん次につながるかなって思う。」と言う。

第五に、高校再入学や高卒認定試験などに関する情報やアドバイスについてである。

67は1人でネットで通信制高校などのことを調べ始めている。「ばらばらなんですけど、いくらだろう、高いところは百万ぐらい1年で。……通信制高校サポート校、なんかそういう感じのやつがけっこう高いなあと思って。で、安くて40万ぐらい。公立の通信は試験があるんで、それはちょっといきたくないなと思って、今から勉強できないなと思って。」ただ身近にそういうことを相談できる人は「いないですね」と。早くに高校を辞めたので、高校教員とはほとんどつながりがなく、中学校にも相談できそうな先生はいないという。

編入学・再入学等にあたっては、447などのように多くは中退した高校の元担任や親しかった教員らから、情報やアドバイスを得ている。中退校教員とのつながりは、いったん中退しても、例えば18歳などの節目を意識しながら、再び学校に戻ったり大学・専門学校への進学を考え始めたりするとき、重要なリソースとなっている。だが早期に中退し、教員との関係をつくる時間さえほとんどなかったり、中退に至る経緯の中で教員や学校と関係をこじらせるなどした場合、高校教員からそのような支援を受けることが難しい。特に家庭状況などで高学費が負担できないなどの条件があると、奨学金などの経済支援を含めた情報・アドバイスが必要とされる。そのような情報・アドバイスの提供を含めた就学相談窓口なども必要であろう。

また高校や個々の教員が中退者と、中退後も何らかのつながりを保てていることは重要で、例えば問題行動などを原因とする場合でも、本人に十分に納得がいく指導など、中退時に関係を断絶させないための配慮などが求められる。さらに中退校や教員は、中退者の多くにとってはそれでも最も身近で相談しやすい相手でもある。特に中退者が多く出てしまいがちな高校などでは、中退者に対応できる窓口や相談機関を紹介できる体制などが求められよう。既に地域若者サポートステーションと学校との連携の試みが一部で始まっているが、こうした取組が広がっていくことを期待したい。

高校としてできる「中退予防策、及び中退時・中退後の支援策」

埼玉県立浦和西高等学校長 菅野吉雄

Findings

中退した生徒の相談相手は、「親」に次いで多いのが「高校の先生」である。
教員が生徒から相談を受けたとき、場合によっては中退後でも、生徒と教員がお互いに相談し合える豊かな人間関係を保ってほしい。教員には、教育の仕事に誇りと責任、そして自信をより一層持ってほしい。
教員の言動が原因で生徒の不登校・中退が発生することは絶対にあってはならない。

1 中退に関する予防と事後対応の在り方

(1) 要因別の高校中退予防策

高校の教育現場に携わる者として、中退要因別に現場で行える予防策について考察してみたい。

アルバイトと学業の両立が難しくなって退学

「バイト終わって遊んで朝帰りとかも結構ありました。で、そのまま寝ないで行ってというのがちよくちよくあって、欠席・遅刻っていうのが続いちゃいましたね。」(1)

生徒がアルバイトを経験することによって、社会性が身に付く、また、労働の意義を学ぶことができる等の効果もある。しかし、アルバイトに熱中するあまり学校の勉強についていけない生徒も少なくないことから、あくまで学業が主であることを生徒本人に理解させることが必要ではないか。高校がアルバイトを許可するにあたっては、労働時間、時間滞、定期考査中の短縮労働、及び成績が不良時にはアルバイトを一時的に中止するなどの条件を付けることが考えられる。

保護者並びに雇用者にも理解してもらうためには、継続的にアルバイト先との連携をすることも必要であり、定期的な職場訪問、雇用者と4者面談(生徒、保護者、雇用者、担任教師)を行うことは重要である。

友達との人間関係が壊れて登校ができず退学

「結構、みんなと合わなくなってきたりして、凄く。付き合っている人が喧嘩早くてですね、私の友達とも喧嘩したりして、友達との仲が悪くなったりとか」(2)

ホームルーム、部活動、学校行事で人間関係を構築する機会を数多く設けたり、カウンセリング体制を充実・整備することが必要ではないか。

携帯電話、インターネットの誤使用による人間関係トラブルも多いので、ネットトラブル防止の教育も重要である。

いじめを受けて退学

「1年生の時から、一応たぶん知っていると思うんですよ。授業中に石投げられて、早退したこともあるんで。知っていたと思うんですけど、やっぱりなんもしてくれなかったです」(3)

いじめを受けている生徒は、自分でいじめを受けているとは、プライドもあり、教員に言えないことも少なくない。一人ひとりの教員がアンテナを高くし、生徒の様子をしっかりと観察することが大切である。いじめを発見したとき、また、いじめ被害の相談を受けたときは、学校全体の

問題として、校長をトップに迅速かつ、組織的対応をすることである。いじめの行為を見逃したり、悪ふざけ程度等の軽い扱いをしてしまうと生徒が教員を信用しなくなってしまう。教員は、いじめを受けている生徒を必ず守りきる覚悟を持たなくてはならない。

また、必要に応じてまずは教育委員会等に報告・連絡・相談し、緊急の場合は警察等の機関と連携することを厭わない姿勢も必要ではないか。

教員の言動による不登校・退学

「学校自体は楽しいんですけど、とりあえず先生が嫌で」(4)

教育の現場では絶対にあってはならないと考えられるパターンの退学である。生徒を指導する場合は、クラス担任だけでなく、教科担任、部活動顧問、カウンセラー、養護教諭、教育相談部等多重の体制をとり、たとえ合わない教員がいても生徒が救われる体制が必要ではないか。教員の言動を向上させるために、カウンセリングマインドでの相談手法などの教員研修を継続的に行うことも重要である。

うつなど精神的な不安定な状態が続き結果的に退学

「それまで『教室に入るのが怖い』ということはなかったんですが、ちょうど2年に上がってから、『怖い』と思うようになりました。うつ病です。(中略)まだ完全に『もう戻った』と言うのではないです。」(5)

医療機関との連携や、生徒の話し相手となり精神的安定感を与えるカウンセラーの配置も必要ではないか。いのちを支えるキャンペーン「ひとりで悩むより、まず相談を」(内閣府自殺対策推進室)は、自殺防止だけでなく、中退リスクの高い生徒へのメッセージになると考えられる。

また、うつ病など精神的な生徒に対応する際の教員研修の充実とともに、担任が個人的に対応するのではなく、校内に外部の専門家も含めて委員会を設置して組織的に対応することが必要ではないか。

現在の子ども・若者は、自分は一人ぼっちだと感じてしまうことが多く、周囲の人々による精神的ケアが重要である。

さらに、発達障害のある生徒も少なくないので、教員が、発達障害のある生徒の理解、支援・指導の仕方について研修を重ねる必要がある。

徒指導(処分)を受けての累積で欠席が増え退学

「『勉強しろ』っていうか、なんかちょっと言っただけで、すぐ謹慎みたいな」(6)

厳罰主義でなく、非行行動からの立ち直りプログラムを用意したり、家庭謹慎(学校に登校させないで、家庭において保護者の監督下、反省させる。)の指導でなく、登校謹慎(高校には登校させるが、通常の授業には出席させないで、教員の指導の下、別室で学習等をさせる。)の指導とすることにより欠席が増えないようにすることが必要ではないか。

留年後のクラスになじめず退学

「10月まで続けて、1年目で駄目だった分を、2年目でどうにかしようと思って、学級委員とかにも立候補し、頑張ったりはしたんですけど、結局クラスにもあまり馴染めませんでした。」(7)

新しい学年のクラスの友人となじめるよう、普段から異学年交流を進めることも必要ではないか。また、元の学年の友人関係も保持するような取組も大切である。

勉強についていけず退学

「もう勉強についていけなくなって、でも頑張ろうとも思えなくて。そしたら授業に出るのもきつくなって、行かなくなりました。」(8)

習熟度別学習の導入や、放課後の補充指導を個別に行うなど、個に応じた指導を充実させることも必要ではないか。数学（算数）、国語、英語の基礎力が全く定着しないまま高校生になっている生徒が少なくなく、小学校、中学校を含めて基礎学習の定着が求められている。先送りをするのでなく、小学校、中学校の、それぞれのステージにおいて基礎学力を確実に身に付けさせることが大切である。

休学はできない旨の説明を受けて退学

「進級ができないことが分かった時点で、とりあえず転学しなきゃいけない、その学校に残ることができないので、できないって言われたんですね、先生に。」〔9〕

休学の制度上のことを正確に説明することが必要ではないか。

生徒が疾病その他やむを得ない事情によって休学しようとするときは、校長あて休学願いを提出させる。ただし、休学期間は引き続き2ヶ月以上、2年以内とする。

[埼玉県での取扱]

高校中退のリスクの高い生徒には、早期発見、早期指導が重要である。中退者の多い学校では、在学中から他機関と連携（教育、医療、福祉、雇用等の機関による官民一体となった連携）し、継続的、かつ、ゆるやかな関係を構築しておくことが大事である。関係は強すぎても、弱すぎてもうまくいかない。ゆっくりでゆるやかなつながりがうまくいくと思う。諸機関が、お互いコミュニケーションを豊かにとりながら、顔をつなぐことが必要である。

（2）辞める時点での対応、中退後の対応

中退する時点や中退後に、高校としてできる対応について考察してみたい。

「ここに連絡すれば、そういう情報があるという。手がかりだけでももらえると、ずいぶん違うと思います。」〔10〕

調査票調査から、高校中退時の生徒の相談相手は、「親」に次いで多いのが「高校の先生」である。教員が生徒から相談を受けたとき、場合によっては中退した後でも、生徒と教員がお互いに相談し合える豊かな人間関係を保っていきたい。

中退後は、学校と中退者との関係は切れてしまいやすく、中退者の状況は把握しにくくなる一方で、特に早期に学校を中退した生徒に対しては何らかの援助が必要であり、中退者を学校や社会から断ち切らない仕組みづくりを行う必要があると考える。

教員と生徒が気まずい関係のまま中退してしまうこともある。やむを得ず中退してしまう場合でも、中退者がいつでも高校に来て相談できる人間関係を学校全体で構築するあたたかい学校づくりを推進していきたい。

（3）教育委員会等での対応（高校の枠を越えた対応）

高校という枠を越えて、他の機関と協力してできる対応について考察してみたい。

地域三者会議

中退者をいかにして支援するか、また、いかにして自立させるかについて、地域の学校、福祉、雇用の三者による情報交換会を定期的を開催することも考えられる。

19歳以上の者を対象にした特別募集～入試制度改革～

埼玉県は公立定時制高校では19歳以上の希望者を対象に、作文と面接を資料にして選抜する特別募集を実施している。入学前の学力に関わらず、意欲や適性を中心に入学を認めることができるという効果があるので、全国的な拡大が求められる。定時制だけでなく全国全ての高校で特別募集を実施することで、再チャレンジしたい者に学びの機会を提供できるのではないかと考える。

教育、福祉、医療、雇用等の官民一体の連携した支援

調査票調査では、「進路や生活などについて何でも相談できる人」、「生活や就学のための経済的補助」、「会社などでの職場実習の機会」、「仲間と出会え、一緒に活動できる施設」、「低い家賃で住める場所」、「進路や生活などについて何でも相談できる施設」、「読み書き計算などの基礎的な学習への支援」、いずれの支援も必要との回答があった。

特に、相談できる人、相談できる施設が重要であり、高校在学段階からの総合的な支援が必要と考える。

中退者への情報提供

転編入先の高校で取得しなければならない残りの単位を知らない者も多い。中退後でも、これらの情報を伝える支援体制が必要であり、特に、中退時には、重要な情報としてしっかり伝えておきたい。

また、各機関は連携し、生徒の進路希望に従って、進学指導、職業訓練等を行うことが必要ではないか。さらに、調査票調査から経済的から見て困窮者も多いので、公的な資金援助、住宅支援も重要である。

2 不本意入学への対応 学び直しと進路を見据えた学習意欲の喚起

(1) 不本意入学の状況

高校入学直後の4月早々から学校に登校しない生徒も少なくない。その背景と考えられる不本意入学の要因と対応について考察してみたい。

校風との不一致

「校則など校風が合わなかった」という理由で退学する生徒も多い。これを防ぐためには、高校選びをするときに、校則などの校風を調べておくべきであると思う。また、入学した以上、その校則などを守るということは、就職する際にも必要な考えと思う。自分の目標を達成するためには、自分に諸条件を合わせるのではなく、自分を諸条件に合わせるという努力も大切である。

高校は、学校説明会、中学校への出前授業、一日体験入学等を通して、中学生に高校の様子を知らせることが大事である。

中学校は、進路指導をさらに丁寧に、適切に行うことも必要ではないか。学力面だけを重視して進路先を考えさせるのではなく、高校の特色・校風を理解させた上で志望校を考えさせることが大切である。

第一志望の学校に不合格、第二志望高校に入学。

個別面談、三者面談を重ね、新たな目標を持たせることが必要ではないか。

第二志望で入学した者の中には、挫折感から立ち上がれず、自己肯定感の低い者も見受けられる。意欲・自信を高めるために、ボランティア活動、社会体験活動、自然体験活動などの体験活動を行い、それらにおける成功体験を通して、達成感・成就感を味わわせていきたい。

良い体験活動は、自信とやる気を醸成するので、学校と社会をゆるやかに結びつける社会体験・職業訓練の場がほしい。

(2) 学習意欲の喚起

一度希望通りにいかなかったも、再チャレンジできるんだということを教えたい。学び直しを含め、中退後の進路を見据えた学習意欲の喚起につながる対応について考察してみたい。

関係機関との連携

ハローワークや地域若者サポートステーションの方々を呼び、中退する前から、中退後の進路相談などを行い、関係機関の職員との間にゆるやかな顔なじみの関係を形成しておくことが大切である。

柔軟な転編入学

高校に対しては、再入学、転学がしやすいシステム、やり直しができるような柔軟な対応が求められている。近年、昼夜開講二部制や三部制高等学校がその役割を果たしていると考えられる。

中退体験者が語る中退リスク講演会

中退した後の「生活・就学・就労で困ったこと」について、在学生を対象に、中退者が体験談を語る会を開催することが考えられる。

3 高卒資格の必要性を認識した時点で対応が可能となる情報提供の方法・仕組みの重要性 中退時に県内の通信制高校関係資料を渡しておくなど

「辞めても例えば高校にも通信とか、大学にも通信制があるとか、高認(ママ 高卒認定試験のこと)みたいな試験があるとか、そういうふうにも他にも選択肢があるっていうのを明確に説明していくべきなんじゃないかと思います。」(11)

「『やっぱり学歴は必要だな』と、思いはじめています。求人広告で『高卒以上』となっている時」(12)

「やっぱり周りの子が大学受験とかいう話になってくると、『ああ俺は受けられないんだ』とか思うと、」(13)

(1) 中退者からの要望

面接調査の中で挙げられた要望をまとめてみたい。

- ・行政の制度やサービスについて、もっと分かりやすい情報発信を。
- ・市役所などの公的機関をもっと利用しやすくしてほしい。
- ・中退した生徒にも情報を与えて欲しい。相談相手になってほしい。
- ・勉強を教えてくれるところ、職場実習の機会をもっと増やしてほしい。
- ・中退してから学校とのつながりがあると良い。
- ・短い時間でも仕事ができるのであれば、そういう経験ができるほうが次につながる。
- ・再入学の手続きが分からなかった。
- ・周囲とのネットワークが弱い。
- ・話しをじっくり聞いてくれる所。
- ・自分のペースに併せて勉強を教えてくれる所。

また、調査票調査を見ると社会サービスに関する認知度が低い。特に、地域若者サポートステーションの認知度は低く、せつかくの機関、人材が有効に活用されていないことが分かった。

相談所の名称の工夫も必要だと思う。相談内容によって相談場所を割り振る機関も必要である。若者は情報収集手段としてパソコンや携帯電話等を頻繁に使っているため、ホームページの活用、携帯電話用サイトの活用も積極的に取り組んでほしい。

(2) 中退時に渡す中退者向けマニュアルの中身

面接調査での意見を踏まえ、中退時に渡すマニュアルの構成について考えてみたい。

- ・ 県内の通信制高校の紹介
- ・ 編入学の手続き
- ・ 高校卒業認定試験の特徴と受験手続き
- ・ 単位制高校の特徴と編入手続き
- ・ ハローワークの利用方法
- ・ 地域若者サポートステーションで受けられるサポート
- ・ 該当生徒の「履修・修得一覧表」(マニュアルとは別に渡す。)

また、一部の語句には説明を付けることが必要ではないか。

- ・ 退学¹：生徒が疾病その他やむを得ない事情により退学しようとするときは、校長あて退学願を提出させる。ただし、疾病により退学する場合は、医師の診断書を添付させる。退学願に基づき、審査の上校長が許可する。
- ・ 再入学²：疾病その他やむを得ない事情によって退学した者が、2年以内に再入学を願い出たときは、退学当時の在学年以下の学年に入学させることができる。なお、疾病により退学した者については、医師の診断書を添付させる。再入学願に基づき、審査の上校長が許可する。
- ・ 編入学³：相当年齢に達し、当該学年に在学する者と同等以上の学力があると認められた場合に、第1学年の途中又は第2学年以上に入学させることができる。
- ・ 転学⁴：生徒がやむを得ない事情によって、転学を志望する場合は、校長あて転学願を提出させる。
- ・ 休学⁵：生徒が疾病その他やむを得ない事情によって休学しようとするときは、校長あて休学願を提出させる。ただし、休学期間は引き続き2ヶ月以上、2年以内とする。疾病による休学の場合は、医師の診断書を添付させる。休学願に基づき、審査の上校長が許可する。
- ・ 高等学校卒業程度認定試験⁶：高等学校卒業程度認定試験は高等学校を卒業していない方が、高等学校を卒業した者と同等以上の学力があるかどうかを認定するための試験です。試験の合格者は大学、短大、専門学校でも受験でき、就職や各種の資格試験等においても活用することができます。
- ・ 単位制高等学校について⁷：単位制高等学校は、学年による教育課程の区分を設けず、決められた単位を修得すれば卒業が認められる高等学校です。単位制高校の特色は、「自分の学習計画に基づいて、自分の興味、関心等に応じた科目を選択し学習できること」「学年の区分がなく、自分のペースで学習に取り組むことができること」などが挙げられます。

1、2、3、4、5 埼玉県教育局編「事務提要」から引用

6、7 文部科学省ホームページから引用

「将来展望」から見た高校中退者のキャリア形成支援

東京聖栄大学健康栄養学部教授 長 須 正 明

Findings

- 学校を經由した進路展望を持たない高校中退者は、学校が教える教育の効果、社会的価値に同化しない、できない環境を経験している。高校入学の動機付けも弱く、不本意入学ともいえる状態である。それでも中退後、さまざまな形で「働く」ことを通して「それなりにやれる」という程度に自分の生き方を肯定できる生活を送っている。学校とそれを通した「成功ストーリー」とは別の一つの生き方ではある。
- 高校に再度入学・卒業という「進路展望」は、高校生活の再経験、望ましい学校生活を送り・望ましい社会的価値を身に着ける正当な機会である。通信制課程は入学が比較的容易で、登校回数も少ない。さらに HR はあるものの、情報の伝達が主であり、教科・科目の学習は自学自習と個別指導が中心である。その意味では人間関係はじめ様々なトラブルによって中退を経験した人にとっては「リカバリー」あるいは「リハビリ」の機能を持つ。ただし、「高校卒業」を目的にした場合、通信制課程がもつ「ゆるさ」が逆にその後の進路の動機付けにならないこともありうる。
- 高認試験は、進路希望が「高等教育機関への進学」の場合に二つの意味で大きな効果を持つ。一つは時間的ロスを回復するという効果である。もう一つは、「具体的に自分がどうするのか」を考えるチャンスを得られることである。「高校卒業のため」ではなく、自分の「これからの生き方」をクリアにしてその方向に進んでゆく出発点としての高認試験の効果である。ただし、高認試験→高等教育機関進学という進路希望・進路目標を可能にするためには、本人の努力だけでは不十分であることは認識しなければならない。まず、高等教育機関に進学することの価値を認める家庭の文化、進学準備～実際の進学を可能にする家庭の経済力、そうした家庭的資源の問題の上に本人の「学力」の問題があるのである。
- 資格取得は明確な「進路希望」であり、「将来設計」の重要な要素になる。特に高校中退という「リスク」を負っている人にとっては、自分のキャリアの「リカバリー」あるいは「社会的な居場所の確保」につながる。特に「高認試験→高等教育機関進学」というルートを選択しない場合、資格（特に技能・技術系の資格）取得は個人が将来展望をもち、キャリア設計することに関して大きな意味を持つ。ただし、それは、技能・技術系の仕事に就いて一定期間それに従事することによって初めて可能になる。
- 将来に対する不安は多様であるが、特に高校中退ということに焦点化されているわけではない。心身の健康に関しては、高校中退の一因になっているケースもあり、福祉とのつながりが今後の生活を展望する重要なポイントになるだろう。将来の生活の前提として、学力に自信がない、進学できるかどうかわからない、仕事に就いたとしてもやってゆけるかどうかわからない、といった不安は消えることがない。
- 高校中退を後悔しているという意見は少ない。後悔しているケースで本質的なのは学校の機能を十分に理解できず、教科科目の学習だけでなく、様々な場面での達成を経験できなかったという後悔である。中退を肯定的にとらえているのは、仕事であれ、進学であれ、何かに取り組んでそれなりの成果をあげ、それを実感している人である。

1 課題提起

ここでは、高校中退後インタビュー時点での「進路希望（将来展望）」を中心に検討する。具体的には、インタビュー調査の質問項目「将来の進路希望」にどのように回答しているかを「学校を経由しない進路希望」「高校に再度入学・卒業後に就職希望」「高校に再度入学・卒業後に進学希望」「高等学校卒業程度認定試験（以下、「高認試験」という。）を経て進学希望」の4類型に分類して考察する。また、様々な「資格」取得、「高校中退の自己評価」に関してもあわせて分析を試みる。

2 中退の原因ともいえる不本意入学

今回の面接調査を通して、「高校中退」という結果同様に「不本意入学」の問題が大きいと感じる。いわゆる「進学校」に入学したが心身の不調で欠席が多くなり進級不可→原級留置（留年）→退学という何人かを除いては、中退はある程度最初から予測できたとと言えるかもしれない。高校生生活を円滑に送るエートスがなかったり、高校で学ぶ動機付けが弱い生徒はたくさんいる。そうした生徒の中の何人かが何らかのトラブルに直面したとき、「学校を辞める（中退）」という選択肢が出てくるのである。中退の直接の原因として挙げられている友人関係のトラブル、成績不振、欠席が多くなって進級が危なくなったり、進級不可になったりすること、等々に直面すると、元々動機付けが弱いので「まずいな」とは思うものの「続けよう」という決断には至らない。「仕方がない」というところで、親なども感情的には「せめて高校は卒業してほしい」と思うものの、具体的に中退を思いとどまらせるほどの強い指導力はない。

不本意入学の内容は「そもそも高校に行きたいと思っていなかった」、「行きたい高校に行けなかった」あるいは「どこでもよかった」といった理由で語られるが、中学校時代あるいはそれ以前から何らかの不適応の要因を抱えていたケースも多い。詳しくは宮崎委員の分析を参照して、本稿との関連で読んでほしい。

3 学校を経由しない進路希望

（1）働く

①（全日制・専門学科：中退理由は学科不適応による成績不良）は、「中卒で働くつもりだった」と述べている。中卒ではなかなか就職先がないためとりあえず高校に進学した感じだが、元々学校に対する期待も低く、学校文化になじめないため、今後も学校に頼らない展望を持っていると考えられる。

②（全日制・普通科：中退理由は不本意入学、生活習慣の未確立で朝起きられない）は、そもそも高校に進学する動機付けが弱い。進学理由は「高校に入ろうと思ったのはノリで。友達が行くから。学校は何となく選んだ。一番バカなんです。不良かオタクしかいないです。自分は両方。ゲームも好き。」であった。家計も厳しく、養育者の教育力も面接調査からはあまり感じられない。経験的にはこのような生徒はいわゆる進路多様校には多数存在すると思われる。学校が教えようとする価値を受け入れにくい生徒であったことが予想される。

③（定時制・工業科：中退理由は小学校から続きたいじめによる人間不信、勉強嫌いによる学業不振、生活習慣の未確立）は、小学校から続きたいじめ、中学校からの不登校、高校進学への動機付けの弱さと不本意入学が重なり、学校を通したそれなりの「成功ストーリー」が描けないケースである。家庭環境も複雑で「なんでもあり」状態である。それでも親を支え、幼い兄弟の面倒を見るなど唯一の資源ともいえる家庭を大切にしたいという思いは十分に伝わってくる。

④（全日制・工業科：中退理由は喫煙による特別指導が長びいたことによって欠時がかさんだこ

と、学校の指導に親も本人も納得せず学校生活を継続しなかったこと)は、元々勉強は好きではないこと、工業高校出身で技能系の仕事に親和性があったことが背景になっている。

《小括》

学校を經由した進路展望を持たない背景は、まず学校が教える教育の効果、社会的価値に同化しない、できない環境を経験していることである。高校入学の動機付けも弱く、不本意入学ともいえる状態であった。それでも中退後、様々な形で「働く」ことを通して「それなりにやれる」という程度に自分の生き方を肯定できる生活を送っている。学校とそれを通した「成功ストーリー」とは別の一つの生き方ではある。

(2) 結婚

〔5〕(定時制・普通科：中退理由は人間関係、学校よりも働きたいと思ったこと、経済的に自立したかったこと)は、本人の育った家庭が必ずしも「仲良く」という状態ではなかったため、「落ち着ける居場所」を自分が育った家庭以外の部分に求めている。現在、「相手」と共に過ごす家庭が中心の生活をしているため、その延長上に将来の生活を考えていると言える。

4 高校に再度入学・卒業後に就職希望

高校への再度の入学はいわば「高校生活への再チャレンジ」である。多くのケースは、入学が比較的容易で、スクーリングの時だけ登校する「通信制」への再度の入学である。

(1) 高校に再度入学を希望

〔6〕(定時制・普通科：中退理由は家計が貧しくアルバイトと高校生活が両立できなかったため)は、中退後アルバイトしているパートさんに「高校は卒業したほうがいいよ」と言われたこと、「乗り」で辞めた高校の先生に相談したら「先生の方で見えてあげるから頑張んなさいよ」みたいな感じが伝わってきたこと、が高校に再度入学する動機になっている。

〔7〕(全日制・普通科：中退理由は遅刻が多いなど生活習慣の未確立による学校不適應とそれに伴う成績不良)は、将来に繋がるように多忙なアルバイト生活の中で語学塾に通っている。高校に再度入学した動機は「高卒を取りたい」である。

〔8〕(全日制・商業科：中退理由は学力不振による進級不可)は、高校に再度入学した動機は母親に「とりあえず高校卒業だけはして、みたいなことは言われた」こと、「私も中卒は嫌なんで。」と自分も思ったことである。

〔9〕(全日制・普通科：高認試験合格を目指して全日制休学、復学後大学行ってサラリーマンみたいな流れが嫌ではみ出したくなって辞めた)は通信制に編入学しているが、その理由は「就職難だし他に行くところなかったら(高卒資格は)必要かなと思って」。

〔10〕(定時制・普通科：中退理由は学校の雰囲気が思っていたものと違ったこと、アルバイト中心の生活になって欠席が多くなって単位の修得ができなくなったこと)は高校に再度入学した理由を語っていないが、親の気持ちとして「勉強より仕事優先みたいな」ことを感じている。現在在籍している通信制課程は、既修得単位から考えて、当初は「半年か1年あれば単位が取れる」計画であった。実際にまじめに取り組んでいけばそれも可能であったはずである。ところが実際には「もう全く行ってないんで、多分学校のほうは駄目になっちゃうかなって感じですね。」という通信制課程の「休眠生」状態である。

《小括》

一番最後に挙げたケースで [10] が語っているように通信制課程は「結局は自分の意思が最終的になきゃ卒業できないよというところ」である。高校に再度入学・卒業という「進路展望」は、高校生活の再経験、望ましい学校生活を送り・望ましい社会的価値を身に着ける正当な機会である。その点で通信制課程は入学が比較的容易で、登校回数も少ない。さらに HR はあるものの、情報の伝達が主であり、教科・科目の学習は自学自習と個別指導が中心である。その意味では人間関係をはじめ様々なトラブルによって中退を経験した人にとっては「リカバリー」あるいは「リハビリ」の機能を持つ。ただし、「高校卒業」を目的にした場合、通信制課程がもつ「ゆるさ」が逆にその後の進路の動機付けにならないこともありうる。この点で生徒の自覚を促し、学校による「卒業後の進路を意識した高校生活」の指導が求められるだろう。

5 高校に再度入学・卒業後に進学希望

(1) 大学・短大

[11] (全日制・普通科：中退理由は女子生徒間のいじめ、体調不良、成績不振) は、中退後別の高校に入学する時も私立高校という選択はなかった。大学進学にあたっての条件は学費が安いことである。大卒後は公務員を希望しているが、具体的な職種まで言及していない。

[12] (全日制・その他の学科：中退理由は複数回の特別指導による出席不足、生活を切り替えるために就労してみること) は、数度の特別指導の末に中退に至ったケースである。高認試験については情報としては伝わっているものの内容等については理解していないようである。高校に再度入学するという選択は「前の B 高校で、担任の先生とか校長先生と約束したんで。自分で仕事して、で自分の金で (高校に) 入ってくみたいな。学校を辞める時に、夢は叶えるみたいな感じの約束をして。先生はその後自分のことを覚えてて、今仕事とかどうだ、みたいな感じですね。」というもので、その点では意味のある選択をしている。

(2) 専門学校

[13] (全日制・普通科：中退理由はひどいいじめを受け心身の不調をきたして登校できなくなったため) は、家計が厳しく、希望は表明しているものの実現は難しいと思われる。それでも、精神的にも身体的にも厳しい中で「高校卒業」までこぎつけることができたのは、費用が安く、生徒間のかかわりがすくなくとも大丈夫という通信制課程のシステムのメリットと考えられる。

[14] (全日制・工業科：中退理由は部活内でいじめ・暴力行為を行ったこと) は、特別指導を受けて、不本意ながら中退に至ったケースである。目標が資格取得であったため、学業継続とその実現のためのアルバイトが十分な動機付けを持って可能であった。本人の反省と目標を見失わない意志の強さがここまでの「リカバリー」を可能にしたと言える。

[15] (全日制・工業科：中退理由は精神的なトラブルとそれに伴う欠席、専門学科に向いていない、自分が思っていた高校の内容と違っていた) は、高校に再度入学した動機は、病気を抱えながらも「人との関わりがあったほうが自分としても結構楽しいじゃないですけど、楽な気もするし、先生から教えてもらおうと、ノートとってとかテストするとか、そういう運だめじゃないですけどできるんで、そっちのほうが楽しいかなと思って。体育的な授業もあったりするんで、そっちのほうがいいかなと思いました。」という学校教育の本質ともいえるものである。しかし、通信制課程と定時制課程の比較はしているものの、高認試験については「全くそんな事聞かないんで。」というほど情報や知識を与えられていない。

《小括》

高校への再度の入学・卒業は最も正当な再チャレンジである。問題は、一度経験した「中退」を乗り越え、教科・科目の学習を続け、特別活動など生徒間のかかわりのチャンスも生かし、「他者とともに生活しながら学ぶ」エートスを身に付けられるかどうかである。その点で、卒業後の進学に関して「資格取得」や「なりたい職業」など、明確な目標設定とそれを促す指導が必要になる。多くの定時制課程、通信制課程で行われている就業体験・アルバイト経験を通じた将来設計の指導と、地域支援ネットワークで情報を共有して見守り、定期的に状況把握するシステムの運用は有効であろう。高校には再度入学したものの再度退学、休眠状態など生徒が学校と離れたときに、その後どこに行って将来を考えればいいのかについては、在学中に「支援資源がどこにあってどのようにアクセスするか」「たとえ辞めてもいつでも学校は情報提供できること」「高認試験の内容とアクセス方法」はせめて繰り返し伝えておく必要がある。今回の面接調査で「高認試験」の知識の有無が、将来展望を具体的なものにできるかどうかの要素の一つであることがわかり、なおさらその必要性を感じる。

6 高等学校卒業程度認定試験（高認試験）を経て進学希望

進学の展望を持ち、実現して進学が決まっている・在学している人は4人、その準備段階にあるのは4人である。進学先が明確な人もいれば、漠然と進学を考えている人もいる。

(1) 専門学校進学

16 (全日制・普通科：中退理由は学校が合わない、生活習慣がきちんとしていないための学校不適応) は、本人がかなり荒れた生活を送り、親はそれを結果的にフォローしている形になっている。学校不適応状態もかなりひどいものだったと推察されるが、在籍した学校はかなり協力的である。高認試験→自動車関係の専門学校入学というルートも「去年くらいかな。その時付き合っていた男が、すごい車いじってて、いじった車に乗せてもらって。わーすごい、みたいな。」という動機である。それでも、自分なりに当面の将来展望を描いている。高認試験によって、確固としたものではないが将来展望を描き、それが実現できる状態は作れているのである。ただし、こうした進路はある程度の家計の経済力があって初めて可能になるものであり、多くのケースのモデルになるというものではない。

17 (全日制・普通科：中退理由は病気発症、長期入院治療による出席不足・留年、体調不良で継続困難) は病気のため高校を中退して、治療・療養しながら生活する中で将来展望を描いているケースである。家計に余裕はない。希望する学校に進学するには、大学、専門学校を問わず多額の学費がかかるなど、その後の具体的な進路希望実現に課題がある。

(2) 大学進学を希望

「大学に行きたいのは、本読んでてもやっぱり無知なのを痛感する所も多いので大学は行っておきたいと。」と語る **18** (定時制・普通科：中退理由は学校になじめなかったこと) は、独自の価値意識によって生活しているケースである。読書好きな本人なりの独自の価値観があり、ある意味では自己完結的である。進路希望に関しても、認識に甘さはあるものの、自分を中心に置いて、社会の状況もある程度考慮したものである。少なくとも、用意周到に高認試験をクリアしたことによって自分の世界を進む状況を作ったことは確かである。それは親が、本人を結果的に「個人として」認める価値意識を持っていることによって支えられているとも言えるかもしれない。ただし、本人も気づいているように希望が実現するか、また「人とかかわり」をどのように作り、維持し、自分の世界と折り合いをつけてゆくかは大きな課題と言える。

19 (全日制・普通科：中退理由は学校になじめなかったこと、欠席が多くなり進学校の勉強についていけなかったこと) は、高認試験を経た大学進学準備は、本人が入学した高校が進学校であったこと、高認試験については元々知っていたという「進学」に向けた環境が大きい。家庭というよりは学校の影響、特に進学についての情報という意味で効果があったと考えられる。本人が語っているように「高卒資格はいつかは欲しいなどは思ってたんですけど、働いているうちはお金が入ってくるの楽しいじゃないですか。それで別にそこまで意識はしてなかったですね。自分が18になって、周りの子が大学受験だとかいう話を聞いて、改めて実感したというか。やっぱり周りの子が大学受験とかいう話になってくると、“ああ俺は受けられないんだ”とか思うと、高卒認定を得ているのと得ていないのでは違いますよね。葛藤があった。」結果として、大学進学という進路希望を持つに至ったのは、卒業はしなかったけれども「在籍した進学校」の見えない影響も考えられる。

20 (全日制・普通科：中退理由は病気発症によって高校生活の継続が困難になったこと) は、病気によって登校できなくなり、留年、退学、高認試験を経て難関学部進学にチャレンジしているケースである。現在は治療の効果により安定した状態になっている。このケースの場合、高認試験の情報は高校が提供した。それを本人は「考えられるだけ、やっていただいた感じです。」と受け止め、高認試験自体に対しても「1年生の単位だけで、3教科だけ受ければ良かったので、ずいぶん楽でしたね。(高認試験に合格したことで区切りがつき、) 身が浮いた感じがします。」と語っている。両親も見守りながらフォローするというスタンスがうかがえる。こうした環境は、ある程度の経済的・文化的資源があるからこそ作れるものではないか。

(3) 大学進学を実現

実際に大学に進学が決まっている、在学している者は3人である。

21 (定時制・普通科：中退理由は朝起きられなくて学校に行くのが向いていなかった) は、入学が容易で経済的負担が軽いことが大学進学の「条件」になっていることがうかがえる。

22 (全日制・普通科：中退理由は勉強嫌い、頑張ることが嫌いだったこと) は、かなり裕福な家庭で育ち、独自の価値観を持ち、精神的には自立している面もあると考えられる。高認試験も情報と知識があり「高校卒業の資格は、2年の夏に高認試験で取った。生物と日本史2科目を受けた。全然楽だった。あとは進学に。」と述べている。ただ、周囲の人たちとの関係については「人間関係がうまくいかないっていうのは、客観的に見て、自分自身は一人でも、まあどうにでもなるんですけど、客観的に見て、一人でどうにかしてるっていう状態が、あんまり良くないじゃないですか。自分が思ってるかどうかではなくて、客観的に見て。」と語っているように、気にはしている。「人とかかわり」をどのように作り、維持し、自分の世界と折り合いをつけてゆくかが課題と言える。その点は、高認試験だけでは決して補えないものである。

23 (全日制・普通科：中退理由はアパシー状態になり学業継続できなくなった) は、地域トップの進学校に入ったものの「その前からすごい学校をサボりがちで、勉強もやる気が出なくて、なら辞めてしまおうと思い決めました。もう勉強についていけなくなって、でも頑張ろうとも思えなくて。そしたら授業に出るのもきつくなって、行かなくなりました。」という理由で中退したケースである。自己イメージと現実のギャップを感じたと思われるが、精神的に病気というところまでは至らなかったケースである。「大学には行きたいと思っていた」と語っているように、目標は大学進学においていた。高校への再度の入学については「私がたぶんそういう勇気がなかったので、新しいところに、高校に入っていくっていうのが(考えられなかった。)」。ただ、すぐに高認試験

受験に向かわずに予備校を経験して、それも「人に教えられるよりは、自分でできたら良いなと思います。」という理由であまり通わないという状況もあり、「学校」に適応していたとは言い難い。それでも高認試験に合格して、センター入試である程度の成果を出して国公立大学に合格できたのは、客観的に見てもいわゆる「学力」があったものと考えられる。

《小括》

高認試験は、進路希望が「高等教育機関への進学」の場合に2つの意味で大きな効果を持つ。1つは時間的ロスを回復するという効果である。高校中退→再度入学→卒業といういわば正当な「学び直し」のルートは、学力の定着、特別活動等を通して他者と関わりながら学ぶ等、「学校教育の意義」を理解する良いチャンスになるが、同時にある程度時間がかかり、人間関係、学校の指導との折り合い、通信制の場合は独特のシステムに適応できるか・・といったリスクもある。その意味では、高認試験は「他者とのかかわりのスキルを身に着けにくい」という問題はあるものの、時間的には不適応になるなどのリスクがない分、負担も少なく効果があると言える。もうひとつは、「具体的に自分がどうするのか」を考えるチャンスを得られることである。この節で取り上げた面接調査のデータの語り手は、希望や目標の強固さには差があるものの、それなりに具体性を持って将来展望を語っている。いわば「高校卒業のため」ではなく、自分の「これからの生き方」をクリアにしてその方向に進んでゆく出発点としての高認試験の効果である。

ただし、高認試験→高等教育機関進学という進路希望・進路目標を可能にするためには本人の努力だけでは不十分であることは認識しなければならない。まず、高等教育機関に進学することの価値を認める家庭の文化、進学準備～実際の進学を可能にする家庭の経済力、そうした家庭的資源の上に本人の「学力」の問題があるのである。

7 資格取得

資格取得は明確な「進路希望」であり、「将来設計」の重要な要素になる。とくに高校中退という「リスク」を負っている人にとっては、自分のキャリアの「リカバリー」あるいは「社会的な居場所の確保」につながる。資格は、特に技能・技術系の資格の場合、必ずしも学校に入学～卒業しなければ取得できないというものではない。実務経験を重ねることによって受験資格が得られて、実務能力を評価される資格も多くある。その意味では、特に「高認試験→高等教育機関進学」というルートを選択しない場合、資格（特に技能・技術系の資格）取得は個人が将来展望をもち、キャリア設計することに関して大きな意味を持つ。ただし、それは学校を経由しない場合、ある仕事に就いて一定期間それに従事することによって初めて可能になる。面接調査のデータからも、ある期間職業に従事して「これでやっていけるというある程度の自信」がうかがえるケースで、資格取得がより強く意味づけられているといえる。

8 結婚

結婚は言うまでもなくプライベート生活の重要な要素である。しかし、「人生の必修科目」ではない。実際には家計の維持など経済的な問題、親をはじめ周囲の人たちとの人間関係など、正面から向き合い、クリアすべき課題はたくさんある。結婚については「幸せ」と「生活」がキーワードになっているが、前者を挙げる人は結婚生活の良い面というか楽しい面を、後者を挙げる人は結婚生活の現実面というか厳しい面を想定して語っている。

9 将来に対する不安

(1) 高校中退の経歴に関して

数は多くないが、高校中退が「将来にひびく」という不安をあげる人がいた。

学校中退って、仕事就く時にちょっと影響するのかっていうのを考えてしまう。[24]

建築系職人は一生できる仕事じゃないですから、体力的に。そうなったときに、高校行ってない、学歴がないからどうするのかわからないです。[25]

(2) 進路に関して

多くの人が将来や進路に対する不安をあげている。ただ、それは高校中退者というよりはこの年代に共通の不安といえるかもしれない。

正直、このまま自分が正社員とかで働けるっていう感じがあまりしない[26]

将来についてすごい不安。まず今やりたいことが特にない。一番は、行きたい専門学校とか、その後の就職先とか、そういうのがない。[27]

具体的に、進学に関する不安を挙げる人もいた。

大学に入れるかどうか、やや不安。数学も受験科目にあるので。[28]

自分の志望する大学に合格出来るかどうか。(その他の点では)今のところ、不安はないですね。やればやるほど、(不安な点が見えてくるんでしょうけれど。[29]

(3) 生活に関して

不安はあるがなんとかなる・なっているという意見があった。

やっぱり20歳とかになって、年金とかそういうものはらっていけるんだろうか?って考えると、やっぱりどうしても不安ですね。[30]

経済的厳しさを挙げる人もいた。

生活できていけるのかなとか、そういう普通のことです。・・・大学に受かったとしてもその大学の方でまともな生活が成り立つのかとか。経済的な不安が強いです。[31]

《小括》

将来に対する不安は多様であるが、特に高校中退ということに焦点化されているわけではない。生活、特に経済的な不安は多くの人に共通である。現在の経済状況では、特に地方圏で十分な仕事がなく、高校中退のままの学歴では職を見つけることそのものが難しい。労働市場の拡大や雇用の増加は望めない状況である。また、そうした将来の生活の前提として、学力に自信がない、進学できるかどうかかわからない、仕事に就いたとしてもやってゆけるかどうかかわからない、といった不安は消えることがない。高校卒業、高認試験の合格、就業とその継続など何らかの「成功」体験を通して、「自信」とまではいかななくても「自分を認めることができる」ような支援が求められているといえる。心身の健康に関しては、高校中退の一因となっているケースもあり、福祉とのつながりが今後の生活を展望する重要なポイントになるだろう。その意味では、特に福祉を背景にした若者の相談を引き受ける「場」や「機関」がもっと広く周知されてよいのではないだろうか。

10 高校中退の評価

高校中退を後悔しているという意見は少ない。後悔しているケースで本質的に語っていると思われるのは2つのケースで、学校の機能を十分に理解できず、教科科目の学習だけでなく、様々な場面での達成を経験できなかったという後悔である。それ以外は中退して「学校のない生活を経験して初めて気が付いた」友達存在や、教科・科目以外の活動、学校の「居場所としての機能」、社会の厳しさと対比した時の学校のゆるさ、等々が挙げられている。

中退を肯定的にとらえているのは、仕事であれ、進学であれ、何かに取り組んでそれなりの成果をあげ、それを実感している人である。それは「自分の生き方を肯定できるまでに成長した証」なのかもしれない。

11 将来展望からみた高校中退者へのキャリア形成支援の方向性—まとめに代えて—

この章では「将来展望」「進路希望」に焦点を当てて考察を進めてきた。最後に、将来展望から見た高校中退者へのキャリア形成支援の方向性に関して述べてこの章のまとめに代えたい。

高校中退は「社会的リスク」である。しかし、リカバリーできないリスクではない。ここでのリカバリーというのは心理的、社会経済的、2つの側面についてである。

まず心理的には「達成」がキーワードになるだろう。大学進学を始めとした高等教育機関への進学、アルバイト労働であってもある程度継続して働く生活のエートスが得られた等々、自分の行動が成果に結びついたという連結性の認識が得られると、現状を肯定的にとらえ更なる将来展望を描くことができるのである。

社会経済的には「自立」がキーワードになるだろう。必ずしも家庭的資源に恵まれているとは言えない人の場合、家庭の文化の影響からいかにして抜け出せるかが課題になる。就職によって、資格取得によって、社会的な居場所を確保することが当面の目標になる。この場合、進学は中間目標にはなりうるが最終目標にはなりえない。その意味では、長期的な展望に立ったキャリア形成支援が必要になるだろう。

今回の面接調査のデータからうかがえる、2つの意味でのリカバリーに効果のある支援のポイントを以下に示す。

① 高卒資格認定試験は「高等教育機関進学」に有効である。

高認試験の効果は、一つは時間的ロスを回復するという効果である。もう一つは、「具体的に自分がどうするのか」すなわち「自分のキャリア設計」を考えるチャンスを得られることである。ただし、高認試験→高等教育機関進学という進路希望・進路目標を可能にするためには本人の努力だけでは不十分であることは認識しなければならない。まず、高等教育機関に進学することの価値を認める家庭の文化、進学準備～実際の進学を可能にする家庭の経済、そうした家庭的資源の問題の上に本人の「学力」の問題があるのである。

この問題のアプローチで注意すべき点は、学校を離れる時点で（中退者はもちろん、卒業生も状況はおなじであるから）「高認試験」の情報を十分に本人に伝える必要があるということである。今回の面接調査のデータでも、「高認試験そのものを知らない」「制度は知っているが内容は知らない」という意見が多かった。とくに、現在不利な状況に置かれている人、高校に再度入学したが不適応状態にある人からそうした意見が聞かれたことを考えると在学中に高校から、あるいはもっと社会的に高認試験について内容も含めて指導・アピールがあつてよい。

② 「就職希望」の場合、支援機関への誘導が課題になる

高認試験は「高卒学歴」ではなく「様々な理由で高等学校を卒業できなかった者等の学習成果を

適切に評価し、高等学校を卒業した者と同等以上の学力があるかどうかを認定するための試験」であり「合格者には大学・短大・専門学校を受験資格が与えられます」（文科省 HP より）。また「高等学校卒業者と同等以上の学力があるものとして認定され、就職・資格試験等に活用することができます」（文科省 HP）とされている。

現状としては、高卒同等以上の学力があるとみなされるが、高卒ではないため、中退者はそのままの学歴では、特に就職においてさまざまなハンデを背負うことになっているのである。

特に、労働市場が厳しい状態にある地方圏では正規雇用は言うに及ばず、非正規雇用でもなかなか仕事がない状態である。就職のチャンスは地域労働市場に規定される部分が大きく、その中である者は「働かないでいるうちに働けなくなる」「精神的にも追い込まれネガティブな部分が引き出され、病気を発症することもある」等々の状況にもなりうるのである。まずは行政機関を中心にした就業支援を行う機関に、困難を抱える若者を誘導するシステムづくり（これは出来つつある）とその運用が何よりも求められる。これは対費用効果が期待できないので、国、地方自治体は責任を持って現状をアセスメントし、支援を継続しなければならない。今やらなければ将来莫大な社会福祉関連費用負担となるだろう。

- ③ 高校（特に定時制課程、通信制課程、全日制地域高校¹）は様々なリスクを抱える生徒に対して「資源マップ」を示し、利用することを指導しなければならない

「どんな困難に対してどんな支援のシステムと資源—支援機関があるか」「支援機関にアクセスするにはどうしたらよいのか」「実際に利用する方法は」など、生徒自身を中心に置いて具体的に示し、実際に支援機関に積極的につなぐ指導を行わなければならない。その際参考になるのは、特別支援学校（学級含む）の教員のネットワークである。特別支援学校教員は在學生はもちろん、卒業生たちに関しても情報を共有して、就職・離職といった社会生活から結婚などプライベート生活まで見守り、支援を続けてきた実践がある。

（詳しくは 長須正明 2010「家族支援」、『ユースアドバイザー養成プログラム』、pp. 274-282、内閣府. の「HATENA MAP」参照）

「子ども若者育成支援推進法」に基づく地域協議会、地域ネットワークも立ち上がり運用されつつあるが、まだまだ試行錯誤、手探りの部分も多い。支援に携わる機関や人のネットワークが実際に繋がり、補い合って初めて「困難を抱える若者に対する包括的支援」が可能になるのである。今回の面接調査のデータを基にして、より効果的な支援の在り方に関する議論が活発になることを願っている。

¹ 都市部、あるいは郊外にあり、その地域の生徒のうち進学が強いわけでもなく、専門科目を学びたいわけでもない生徒が多くを占める高校。入試の倍率も低く、生徒指導上の問題も発生しやすく、教員の指導も難しい高校と考えられる。

就学者（高校再度入学、大学進学、専門学校進学）のケースを中心に

法政大学社会学部准教授 樋口明彦

Findings

- ① 高校を中退した若者にとって、教育機関に再び戻る経路は目的に応じて大きく異なる。高卒資格を取得するために高校への再度入学を目指す者は、通信制や定時制の高校に通うことが多い一方、専門学校や大学などの高等教育機関への進学を目指す者は、「高等学校卒業程度認定試験」（以下「高卒認定試験」という。）を受け、受験資格を獲得した上で、入試に望む者が多い。つまり、後者の場合、必ずしも高校に再び在籍することなく、高等教育機関へ進学することになる。
- ② 高校に再度入学した者の日常生活は、必ずしも高校生として期待される学業生活に限定されるわけではない。高校在籍者は、様々な事情に応じて、アルバイトをしたり、家事や育児に携わったりなど、複数の役割を同時にこなしている者も少なくない。将来のキャリア形成を考えた場合、学業生活と職業生活のバランスが重要な位置を占める。
- ③ 再び就学を試みる若者が全て、目標とすべき進路をはっきり決め、その実現に邁進しているわけではない。幾多の選択肢の間を迷いながら試行錯誤して、将来展望が定まらない者も存在する。

1 就学者の現状について

本稿では、高校中退後、再び就学することになった、あるいは現在就学を目指している若者を中心に検討する。例え、様々な理由から高校を中退するに至ったとしても、ほとんどが10代である若者にとって、就学は最も重要な選択肢の一つである。今回の面接調査の対象者は、男性20名、女性21名、合計41名となっているが、本稿で主に扱う就学者は、男性11名、女性9名、合計20名である。

ただし、就学者の歩みを容易に一元化することはできない。したがって、本稿では、必要に応じて乾委員が主に担当する就労者・無業者の男性4名と女性3名、そして吉田委員が主に担当する同棲・結婚・出産・育児に従事する女性1名についても合わせて言及する。

（1）高校への再度入学

面接調査が行われた時点で、すでに高校への再度入学を果たしている者は、男性が①、②、③、④、⑤の5名、女性が⑥、⑦、⑧、⑨、⑩の5名で、合計10名である（ただし、⑩は育児をしながら私立高校通信制に通っている）。このうち、公立高校と私立高校の違いはあるものの、全員が通信制の高校に在籍しており、高校中退者が高校に戻る際に教育課程の中でも通信制が非常に大きな受け皿になっていることがうかがえる。ただ、今回の面接調査では、高校へ再度入学した者の所属先は全て通信制高校になっているものの、調査票調査で見られるように定時制高校の場合も少なくない。この点は、今回の面接調査における対象者のバイアスと考えられる点を付記しておこう。

全日制や定時制から通信制という新たな教育課程に移ることについて、生徒の受けとめ方は賛否両論である。通信制の肯定的側面として、「通信制の方は、面白いっていうか、同じような境遇だったり、ちょっと単位（制）より自由なところがあるんで、そういう部分では通信がいいかなあつ

ていう」(6)、「居心地は悪くはないですね」(9)、「楽しいことは、先生がみんな楽しくて、好きにやらせてくれるというかあんまり縛られていない感じであること」(10)のように、自分で履修計画を立てて勉強を進める自由な雰囲気を主張する者が多い。また、「普通高校（全日制※引用者注）に比べるとそこまで難しくもなかったので、比較的楽に取れた」(5)と難なく勉強をこなす者がいる一方、「だからその辺の高校生よりやっているとします。働いていても、休み時間は弁当食いながら勉強しています」(1)、「スクーリングは、毎週ではないが、多ければ月に、5回から7回くらいは行きます。……電車で2時間、けっこう大変。毎日じゃないからなんとかやっている」(4)のように、日々努力しながら学校生活を送る者もいる。だが、通信制高校の自発性に基づく学習スタイルは、「やっぱり全日制的のほうが楽しかったなっていうのが。言い方は悪いんですけど、地味なコたちが多くて、あまりコミュニケーションがとれないようなコたちが多いで、友だちもできないし、つまんないなって感じ」(1)、「クラスもないし、誰が来てるかも分からない。…もう全く行ってないんで、多分学校の方は駄目になっちゃうかなっていう感じですね」(3)のように、時として生徒に学校生活に対する不満を抱かせることにつながっている。

とはいえ、通信制高校に通う生徒の多くが、「理由は、高卒の学歴が欲しかったから」(7)、「やっぱり高校の卒業資格は持っていたほうがいいかなって、行こうと思いました」(1)、「中退しても働かないで、私立高校（通信制・普通科）にしたのは、高卒資格が必要だと思ったから」(4)のように、共通して高卒資格を重要なものと見なしていることに変わりはない。このことは調査票調査からも読み取れるものである。また、このような発言は、「たとえば土方（ママ※引用者注）やめさせられちゃったら、たとえば20いくつとかだったら、就職難だしほかに行くところなかったら、（高卒資格は）必要かなと思って」(2)と述べているように、将来のキャリア形成を見越した意見でもあるだろう。ただ、通信制高校に在籍している者の中でも、「高校卒業資格は必要だと思っている。ただし、職人という目標と高校卒業資格の有無はまったく別物と捉えている」(3)のように、職人という具体的なキャリア形成の展望の中で高卒資格の価値に距離を置く者も存在する。

(2) 大学への進学

面接調査の中で、既に大学に進学していた者は、男性が11の1名、女性が12、13の2名、合計3名である。11は、公立高校（定時制・普通科）の在学時に高卒認定試験を受け合格、その後高校を中退して、私立大学（通信制）に進むことになった。その大学を選んだ理由として、スクーリングに行く回数の少なさと学費の安さを挙げる。12は、公立高校で好成績を収めるものの、高校を休学して、サポート校に通いながら高卒認定試験に備える。教師や親を説得して、高校を辞めた後、私立大学に進学する。この大学を選んだ理由は、特にないと答える。13は、公立高校普通科全日制を中退してから、予備校や個別指導塾に行きながら、高卒認定試験に合格する。そして、家から通え、お金のかからない国公立大学という条件のもと、大学受験に臨み、無事国公立大学に進学することになった。

大学生活の状況を見てみると、「一番大変なのはレポートの書き方がわからないこと」(11)と戸惑いを感じている者もいるが、「大学は楽しいですよ。……今は理想的な形が描けています」(12)、「大学は普通にやってます。授業が自分の興味あるものなので、楽しいです。……大学は、専門的な知識なので、教えてもらわないとわかんないことがたくさんあるので、授業は価値があると思ってます」(13)のように、学習の習慣が身に付いた者にとっては充実した時間となっている。

このような大学進学背景には、具体的な将来展望の存在も垣間見える。例えば、「働くって言

っても高校すら卒業できなかった人間にはそんなに仕事もないですし、大学出て資格を取るのが手っ取り早い」と考える[11]は、経営診断士（ママ※引用者注）を目指している。また、[12]は、大学で保育士の資格取得を考えるほか、将来は「全ての人が生きやすい社会を作りたい」ため地方公務員を目指している。[13]も、教員にも関心はあるものの、大学時代に海外留学を視野に入れ、国際関係の仕事に就くことを望んでいる。これらの3名は、自らの将来設計の中に大学教育をうまく取り込んでいるといえよう。

（3）専門学校への進学

専門学校に進学した者は、[14]、[15]の女性2名である。[14]は、「あたし美容師になりたくて、専門行こうっていうの決めてたんですね。それで、専門行くにも高卒の資格が要るんで、高卒認定試験取ればまあいいだろうみたいな」と述べ、高校在学時から明確な将来展望を持っていた。中退して、高卒認定試験に合格後、[14]は美容師の専門学校を受験して合格している。インタビュー時、[14]は春からの入学を待ちながら、ファミリーレストランでアルバイトを続けていた。[15]の場合、学校を長期欠席するようになってから、コンビニ・飲食店など、様々なアルバイトを経る。その後、予備校に通いながら、高卒認定試験を受ける。「親がどっか専門（学校）に行けって言った」ので、自分の好きな自動車関係の専門学校に進むことにする。

すでに専門学校に通っている[15]は、「ここ2、3週間はちゃんと行つとる。でも、最初（学校へは）ほとんど行ってなかった」と述べる一方、授業は「楽しい」と答える。結婚については、「別に仕事を辞めてまでしたいと思わないから」と言うように、将来も仕事を続けることを念頭に置いている。結果的に、「（自分は）何となくだったけど、働きたいと思って辞めたから。高校なんか行かなくていいと思ってるし」と述べる[15]にとって、学校は単なる学歴の取得ではなく、生きてゆくための職業生活の一環に位置づけられている。

（4）就学にむけて準備中

就学者の中には、既に高校への再度入学、大学や専門学校への進学を果たした者だけでなく、現在就学にむけて準備中の者も含まれる。この範ちゅうに該当する者は、男性が[16]、[17]、[18]、[19]、[20]の5名、女性が[21]の1名、合計6名である。

このうち、[21]は高卒認定試験の準備中である。主に体調不良のため余儀なく中退した[21]は、大学あるいは専門学校への進学を希望しているが、経済的事情のため進学が難しい状況にある。現在、高卒認定試験のための勉強を続けるものの、具体的な進路先は定まらないままである。

その他の5名は、すでに高卒認定試験を合格して、大学入試の準備を進めている。もちろん、大学合格への見込みはそれぞれ異なっている。公立高校単位制に通っていた[16]は、在学中に高卒認定試験に合格してから、中退した。当初から大学進学を希望していたので、高校中退後、予備校には通わず、自宅で勉強を進めるものの、「今関東の国公立大学を受けようと思っているんですけど、多分落ちるんです」と述べるように、その進捗状況は芳しくない。また、公立高校全日制を中退した[20]も、塾に行きながら受験勉強を行うが、「もしかしたら足切りにあうかな」という手応えで、合否に不安を抱えている。[17]と[19]は、入試の結果待ちの状態である。[17]は、全日制高校を中退後、アルバイトを経て、塗装の仕事に従事するようになる。その後、予備校に在籍して高卒認定試験に合格してから、私立大学を受験し、現在合否発表を待っている。また、[19]は、私立高校普通科を中退後、予備校に通うも続かず、改めて公立高校普通科に再度入学した。ただ、2校目も中退してから、国公立大学を受験することになった。最後の[18]は、高卒認定試験に合格後、公立高校

普通科を中退して、予備校に通いながら入試に備えた。面接調査時には、私立大学に合格している。

(5) 就労・家事・育児から高校への再度入学を希望

高校中退者の就学に対する思いを見てゆくと、現在アルバイトや正社員として働いていたり、家事や育児に従事したりしている者の中にも、もう一度高校に復学したいと考えている者が少なくないことに気づく。就労あるいは無業である 20 名のうち、7 名は何らかの形で復学を考えている。実際、高校中退後、食品加工会社でアルバイトをしていた [22] は、「高校を辞めて、約 1 年遊んで、もう一回勉強したくなった。……高校卒業の資格を取っておいたほうがいいと言われて」と述べ、4 月から再び元の公立高校定時制に戻る予定である。また、ラーメン屋のアルバイトをしている [23] も、3 月に公立高校定時制の受験をするため、すでに願書を提出している。そのほか、いずれ定時制高校に再度入学したいという希望を表明している者として、寿司屋でアルバイトをしている [24]、求職中の [25]、育児中の [26] がいる。同じように、いずれ通信制高校に再度入学したいと考えている者として、3 つの飲食店でアルバイトをする [27]、金属加工工場でアルバイトをしている [28] を挙げることができる。

もちろん、高卒資格がないため労働市場での求職活動に不都合を感じる者、高校生活をやり直したい者、高卒資格の必要性を感じる者など、高校への再度入学を望む理由は様々である。しかしながら、職業生活において具体的な将来像を描けなかったり、いまだ自分が進むべき道を模索したりする若者にとって、高卒資格は一つの重要な里程標であり続けているといえよう。

2 就学のためのサポート

ここまで就学者の現状について整理してきたが、就学に至る道のみを見てゆくと、そのプロセスには就学のためのサポートが大きく関与している。次に、そのサポートのありようについてまとめよう。

(1) 教員のサポート

再び就学を目指すにあたって、中退した（する）高校の教員によるサポートも重要な役割を果たしている。中退が生徒の視野に入ってくる際、幅広く相談にのめることは教員の大きな役割の一つである。中でも、通信制高校や高卒認定試験に関する実務的な情報は、その後の進路を決めるうえで欠かせない。「担任の先生に相談したら、同じ高校の通信制に移るという方法を教えてくれた」([29])、「3 年生に上がれなくなった後は、先生も次の進路に向けて協力してくれました。募集が職員室にあったんで、その高校見つけて、願書とかこの日までに書かなきゃ間に合わないとかだったんで」([30])、「前に行っていた学校の 2 年のときの担任の先生が、こういうのがあるよって。もう学校辞めたのに電話かけたり、家まで来たりしてたんですけど」([31])、「担任が、すごくいい人だった。辞めてからも『こういう学校あるぞ』みたいに、資料を家に持ってきてくれ、結構いろんな形で後押ししてくれた」([32]) のように、転編入する通信制高校の候補先を提示したり、「学校の先生からそういう制度があるよと」([33])、「相談に乗ってくれたり、高校卒業程度認定試験のことを教えてくれた」([34]) のように、高卒認定試験の制度について説明したりと、教員はともすれば途方に暮れかねない学生の進路選びに有益な情報を提供している。

しかしながら、生徒と教員の関係は、いつも円満なものとは限らない。一方で、とりわけ担任教員との不仲は、教員だけでなく学校そのものに対する信頼関係を失わせ、役立つ情報を獲得するルートを閉ざす結果に至る。例えば、[35] は、「先生に相談はしなかったです。最初はいい人だと思っていたんですけど、職員室行くと、なんか先生同士すごい生徒の悪口言っているのが聞こえてきて」

と述べ、「生徒の気持ちを全く考えてないんですよ」と強い不快感を示している。「(卒業できるように頑張れと) 言ってくれる先生もいるんですけど、信じてくれない先生ばっかでしたね」と述べる [36] も、教員の「一方的な感じ」を享受している。また、[37] は、担任教員と教頭との面談において、「高校で、『いじめがあった』と言っただけけれども、学校の世間体を気にしているみたいで、結局辞めた理由は『一身上の都合』となっている」と指摘している。ただ、仮に担任教員とはうまく折り合いがつかなくても、生徒の多くが相談できる他の教員を見出していることも事実である。その相手とは、かつての担任教員や各教科の教員など、生徒によって様々である。

中退が視野に入っていない限り、通信制高校や高卒認定試験などの情報は、生徒にとってもなかなか接することが少ない。したがって、たとえ担当教員との折り合いが悪くても、中退者に対して中退後に活用できる社会制度の情報を最低限提供する仕組みを検討することは重要だろう。

(2) 友人のサポート

中退後の進路を考えるうえで、教員のサポートだけでなく、友人のサポートもしばしば利用されている。[41]・[42]・[35] は、既に中退を経験した友人や周囲の友人から、高卒認定試験や通信制高校に関する情報を獲得している。とりわけ「中学時代の友達も学校辞めていて、友達は先に行っていて、いいよ、みたいな話聞いたので、行ってみようかなと思って行きました」と述べる [35] のように、教員や学校に対する信頼関係がない場合、友人からもたらされる情報は欠落を補完する重要な判断材料といえる。

(3) 家族のサポート

では、中退後の進路形成を考えるうえで、家族のサポートはどのような役割を果たすのだろうか。中退に対する親の受容も、その当時の親子関係のあり方に応じて違いがある。中退という子どもの決断に対して、当初はとまどいや拒否反応を示すものの、時間が経過する中で徐々に中退を容認し、新たな進路を見守るケースが比較的多い ([43]、[38]、[35]、[40]、[44]、[37]、[34]、[45])。ただ、親の受容の中には、中退について親子であまり話し合うこともなく、すでに下した判断を子どもが親に伝えるだけという場合 ([29]、[46]、[30])、そして「別にいいんじゃない、辞めたきゃ辞めれば、でもそのあとの人生は保証できないよ、ってお母さんに言われていた」([31])、「欠席遅刻が続いていたときも、親からはあまりうるさく言われていない。最初は言われてたんですけど、まあ見放されたかなって感じですね」([36]) などのように、結果的に親が中退について関心を持たない場合も存在する。親との関係性は、時に問題を抱えている。「留年については自分がしたいならしなさいみたいな。反対とかはなく普通にそうかみたいな。体調崩した時期から親との関係あんま良くなくて」と述べる [39] は、障害を持つ両親とのコミュニケーションに困難を覚えている。[47] も、中退当時の親子関係が抱えていたトラブルを指摘する。

就学者の進路形成を見てみると、このような親子関係に加えて、親世帯の経済力も影響力を与えていることがわかる。まず、親世帯が担うことのできる金銭に何らかの限界がある場合、高校中退者は、自らの選択肢として大学や専門学校への進学を変更することがありえる。例えば、私立高校通信制に通う [30] は、看護・保育・福祉の学校に進もうと考えていたが、勉強とお金のために諦めている。また、私立高校通信制に在籍する [32] は、専門学校で測量士の資格を取得するため、自らアルバイトで学費に充当する 70 万円を貯金している。将来、選択肢の一つとして美術大学への進学を考えていた [39] も、お金のために美大進学を断念せざるをえず、進路を決めかねている。その他、大学費用の負担を軽減するため、[41] は私立大学の通信制に進み、[45] は進学先の候補を国公立

大学に絞った。

進路に関わる経済的負担の問題のほかに、日常生活における世帯の経済的な厳しさを訴える者も少なくない。家計の苦しきについて言及する [31]、[36]に加えて、親世帯の状況として、兄弟姉妹が多い、借金がある、父が就学中で貯金を取り崩している、経営していた会社が倒産して父が求職中などの事由が挙げられている。もちろん、親世帯の経済状況が子どもの進路に与える影響を、簡単に整理することはできないが、将来の進路を選ぶ際の大きな判断材料になっている様子はいかがえる。

(4) 塾・予備校などのサポート

高校中退者が就学するプロセスの中で、大きな役割を果たしているものに、塾・予備校・サポート校など、民間団体による教育支援の存在が挙げられる。とりわけ、中退後、高卒認定試験に合格して、大学や専門学校を目指す場合、受験に必要な学力を身につけるため民間の学習サービスは欠かすことのできない存在になっている。

大学に進学した3名のうち、民間の学習サービスを活用しながら、大学受験に備えた。それ以外に、私立大学通信制に在学する [41]は独学で勉強を進めたが、当時の事情を「受験勉強というよりもライトな感じだった」と説明している。

その他、就学にむけて準備中である6名のうち、5名は学習サービスを利用している。例えば、大学進学を目指す [40]、[44]、[33]は予備校に通った経験を持ち（ただし、精神的に不安定な [33]は3日で予備校に行けなくなる）、また [34]は英語塾に行っていた。美術に関する大学や専門学校を志望する [39]は、絵画教室や美術学校に通って、技術を磨いている。先に触れたように、民間の学習サービスを使わず独学で受験勉強を進める者が、合格への難しさを語っていることを改めて想起すると、仮に高校を卒業せずに、高卒認定試験を受けて大学進学を目指すにしても、受験を支える何らかの学習サービスが必要とされている事情がうかがえる。このとき、塾・予備校などのサポートを負担できる親世帯の最低限の経済力が条件となることは、容易に推測できよう。

3 就学者のキャリア形成

では、就学者のキャリア形成を大きく左右する点として、どのようなものがあるのだろうか。以下では、3つの留意すべき点を指摘することにした。

(1) 学業生活と職業生活のバランス

就学者の将来展望を見てみると、そこには、進路に応じたおおよその傾向を見出すことができる。まず、専門学校や大学へ進学した者、あるいは進学準備中の者の場合、卒業後に志望する具体的な職業を想定している者がほとんどである（経営診断士（ママ※引用者注）、公務員、教員あるいは国際関係の職業、美容師、自動車に関する仕事、物書き、教員、視覚効果に関する職業、建築士・インテリアプランナー、医師、美術に関する職業）。もちろん、このような希望職種に従事できるかどうかは、実際に求職活動を経なければわからず、就職未決定のリスクは当然残っている。しかしながら、このリスクは決して中退経験者に限ったことではなく、広く同世代の新規学卒者に共通したものである。したがって、日本における労働市場への参入過程が「新規学卒一括採用」という雇用慣行のもとで成り立っている以上、卒業の時期を目処に、学業生活と職業生活ははっきりと区分されているといえよう。つまり、大学や専門学校に就学した者のキャリア形成の歩みは、卒業に合わせた就職活動というタイミングのもとで一元的に管理されることになる。そのため、たと

え学生時代にアルバイトをしていたとしても、それはあくまで卒業までの一時的な活動にすぎない。

だが、高校への再度入学を果たし、通信制高校に通う者の場合、そのキャリア形成は少し異なった軌跡を描いている。第一に、何よりも、日常生活の中でアルバイトの占める時間がとても大きいことがうかがえる。事実、通信制高校の場合、生徒は学校に毎日通学する必要はなく、決まった日だけスクーリングに参加する。したがって、通信制高校に通う9名のうち、6名は空いた時間にアルバイトをしている（社会保険労務士の下でアルバイト、コンビニのアルバイト、居酒屋とファーストフード店のアルバイト、スーパーの準社員、宅配寿司のアルバイト、回転寿司のアルバイト）。アルバイトをしていない3名のうち2名は病気によるものと思われる。

第二に、通信制高校の場合、学校における進路指導の有無が生徒の就職を大きく左右する。「先生は通ってきている生徒みんなに就職の支援とかをしてくれている」と述べる[48]は、先生の紹介で建設会社の事務職として就職することが内定し、2011年4月から9月までは高校に通いながら働く予定になっている。他方、進路指導が希薄なケースも存在する。「でも今は普通科の通信なんで、そういうこと（進路指導※引用者注）がなかったんですよ。ないって、当たり前ですよ、通信だから。私も聞かなかったのかわかんないんですけど、9月ごろになって、『どうすんの？』みたいな感じになって、でも9月ごろっていうのは、もう前の友達みんな就職活動し始めて面接練習とかも始めてたんで、……それでなんか、『いいや』ってなっちゃったんですね」という[49]の発言からも分かるように、単位制のもと自らカリキュラムを設定する通信制高校では卒業に合わせた就職活動というタイミングが十分に機能しないことがある。これは、学業生活と職業生活を分ける節目が不明確になり、職場への移行が難しくなる要因の一つになりえる。

第三に、職業生活の比重が高い通信制高校では、将来のキャリア形成においても、現在従事しているアルバイトが重要な踏み台になることがある。通信制高校での進路指導が乏しいと感じ、金銭の問題から看護・保育・福祉分野への進学も断念した[61]は、現在働いているファーストフード店の「社員登用制度」を視野に入れ、将来のキャリアを計画している。また、[50]は、「高校を卒業したらそのままスーパーで就職しようかなど。卒業後正社員にならないかと前の店長から声をかけられた」と述べ、その会社の「幹部」になることを目標にしている。そのほか、本人に応じる意志はないものの、宅配寿司のアルバイトをしている[51]にも、その店舗の店長にならないかという誘いがある。

このように、通信制高校に通う者の場合、大学や専門学校に通う者に比べて、学業生活と職業生活の分岐はいつそう曖昧にならざるをえない。必要な単位が個人によって異なり、半ば自己責任で卒業までのプロセスを管理しなければならない通信制高校の場合、いつ、どのように職業生活へ完全に移行するかという決断の時期は、とても見極めにくいのが実情である。むろん、このような状況は、現在働きながら、いずれ定時制高校への再度入学、あるいは通信制高校への再度入学を希望している者にも共通しているといえよう。

通信制高校や定時制高校で学ぶ若者にとって、学業生活と職業生活のバランスをいかに維持して、安定した職業生活への移行を保障するかということは、極めて重要な問題といえる。

(2) 定まらない将来展望

通信制高校に通う者たちのインタビューから浮かび上がるもう一つの姿は、将来の展望が定まらないことに対する不安である。通信制高校に在学する生徒にとって、専門学校や大学への進学、あるいは職業生活への移行という将来の展望が立たない場合、現在の学業生活が向かうべき方向性を定めることができない。[52]は、大学進学・専門学校進学・就職という選択肢がある中、進路を明確

に決めることができず、「これから先、先が見えてないっていうのが一番不安ですね」と語る。また、[53](#)は「土方（ママ※引用者注）の友達はあるっちゃいるけど、今は彼女んちの近くで土方やりたくて」と述べる一方、土木作業員の仕事が長く続けることのできない、一時的な仕事であることも暗に仄めかし、将来に不安を抱いている。「将来についてすごい不安。まず今やりたいことが特にない。一番は、行きたい専門学校とか、その後の就職先とか、そういうのがない」と述べる [54](#)も、将来展望が定まらない不安を共有している。

自分で単位の履修計画を立てるだけでなく、学業生活と職業生活が密接に交わり、どちらに進むべきかの選択が迫られる通信制高校の状況の中で、生徒は自分の下した判断に大きな責任を課せられる。「通信制の先生は明確な目的とか、何がしたいっていうのがないと相談に乗れないって言われる」[52](#)という学校風土では、将来展望が定まらないことは、いたずらに不安定な現状を引き延ばすだけのリスクにつながりうる。このようなリスクは、決して通信制高校の在學生に限ったことではなく、現在働きながら定時制・通信制高校への再度入学を望んでいる者にも、潜在的には該当するといえよう。

(3) 準拠集団としての同年代の友人

上記のように、就学者のキャリア形成は、学業生活と職業生活のバランスという点において大きく異なる。さらに、就学者の将来展望に大きな影響を与える要因が、同年代の友人の動向である。つまり、高校中退者にとって、同年代の友人は、自らの行動の規範となるべき準拠集団の役割を担っている。

第一に、高校中退という経験によって標準的なライフコースから外れた若者にとって、同年代の平均的な友人が高校を卒業して、大学に入学する 18 歳という年齢は、自らの行為を考える重要な参照軸となる。「自分が 18 になって、周りの子が大学受験だとかいう話を聞いて、改めて実感したというか。やっぱり周りの子が大学受験とかいう話になってくると、『ああ俺は受けられないんだ』とか思うと（高卒認定を得ているのと得ていないのでは）違いますよね」と述べる [55](#)は、18 歳という年齢が自己と同年代の友人を比較する契機になっている。[56](#)は、高校中退後、予備校に通い始めた動機を、次のように語る。「この予備校に入学した 4 月は同級生は大学に入学したりで。……でもハッて気付くと同級生たちはもう次のステップに足を踏み出している。それを見て焦り出して、やっぱり大学に行きたいとか行かなきゃという思いで予備校に入学したはいいいけど、まだ気持ちが整わないままで勉強に対して全くと言っていいほど意欲がわかかなかった」。[56](#)は、同世代の友人たちの歩みと自分の歩みとのあいだに大きな隔たりを感じ、焦燥感に苛まれている。

第二に、同年代の友人が準拠集団としての機能を果たしているからこそ、高校中退者は同年代の友人から進級が遅れて、同じ学校に居残り、教育を受け続けること（いわゆる原級留置）を忌避することがある。多くの全日制・定時制高校が教育課程として学年制を踏襲しているため、同学年に属することが大きな意味を持つ。「私も私で、ひとつ下の子と一緒に勉強するのも嫌なので」と述べ、進級できないことがきっかけで中退する [49](#)、「高校留年も選択肢にはあったんですけど、[51](#)の学年が）年下とつるまない、絡まない学年だったんで、あんまり仲いい奴がいなくて、入っても毎日…多分でも友達とかすぐ作れると思うんですけど、もう 1 年って考えると場所も遠くて」と述べる [51](#)は、共に留年によって一つ下の学年と同級になることにためらいを感じている。中退後、ダンス部での活動がしくて復学した [53](#)も、「さすがにねえ、2 コ下だから、周り全部。そのときはほんとにそれが（嫌だった）」と、当時の心境を振り返っている。高校中退後、美容師の専門学校に進んだ [57](#)も、「個人的には、周りと同年代がずれて専門行ってしまうのが嫌だったんですよ。私

が入学する頃には一コ下の子も一緒に入学したいな、そういうのが嫌だったんで、1年で高卒認定試験は合格しなきゃって思ってたんで」と述べ、同学年の友人と同じペースで進むことに意味を見出している。⁵⁸が「普通の人が3年で卒業するっていう当たり前のことが出来ていないというのが、我ながら情けなくもあった。だが、真面目な友人も4年通っていたりとかもしたんで、4年目までは交友関係が特別大きく変わることもなかった。途中でほかの高校から入ってきたやつとかも仲良くなっていたが、俺が5年目の時には多くの友人が卒業することになった。俺がその年に卒業できるのかって言うとな出来ないわけで、その頃は不安に感じるがあった」と言うように、たとえ学年制を敷かない単位制高校であっても、同年代の友人は重要な参照軸の役割を果たしている。

確かに、準拠集団として同年代の友人が存在することは、高校への再度入学や進学を目指す者にとっては学校に戻る有効な誘因になりうる。しかしながら、同世代への目配せは、時に高校中退を招く要因にもなりえる。このように考えると、就学者の準拠集団が、ともすれば同年代の友人という学業生活に限られた者であることに気づく。高校中退者が新たな職業生活へ移行するのならば、同世代の友人という学業生活の参照軸ではなく、職場の同僚や先輩など職業生活の新たな準拠集団を見出すことが一つの契機になりうるかもしれない。だが、正社員ではなく、アルバイトに従事するしかない就学者が、職業上の役割モデルを見出す様子はあまりうかがえない。ただ、若者たちは、日常生活の中から職業に結びつくつながりを見つけていることも事実である。例えば、美容師を目指す⁵⁷も、小学校時代から6年間担当してもらっていた美容師を見て、その夢を育てていったのである。

4 就学者が抱えるニーズ

ここまで、就学者のたどってきたライフコースを検討してきたが、最後に就学者が抱えるニーズについて触れておこう。

(1) 健康上の問題

インタビュー対象者の中には学業生活や職業生活を満足に送ることのできない理由として、健康上の問題を抱えている者がいる。病気や怪我があっても、医療機関のサービスによって完治すれば、日常生活に戻ることができるが、もし完治しなければ、その病気や怪我と折り合いをつけながら、これからの生活を模索していかなければならない。

病気にいたる経緯も様々である。第一に、いじめのように、学校環境の問題が原因で病気になる者が存在する。女子によるいじめが原因で体調を崩し、心療内科のデイケアに通う者、クラスの同級生とトラブルになり、声が出なくなったため、メンタルクリニックに通院するようになった者など、学業生活に与える影響は極めて大きく、深刻である。もちろん、第二に、本人の身体的な理由で病気になることがある。「なんか糸がこうプツンって切れたように」不登校になり、中退した後、軽いうつで心療内科に通うことになった者、高校入学後、高熱を伴う発症で入院を余儀なくされた者、うつ病になり、「教室に入るのが怖い」と感じるようになった者などがいる。

このように健康上の問題を抱える5名の将来展望を見てみると、そこにも不安定さを見出すことができる。⁵⁹・⁶⁰・⁶¹は大学への進学を目指しているが、⁵⁹と⁶¹は受験勉強が思うように進まず、大学に合格できるか不安を抱いている。⁶²も、大学あるいは専門学校への進学を考え、高卒認定試験の勉強に取り組んでいるが、進路先の目処は立っていない。⁶³も、「将来についてすごい不安。まず今やりたいことが特にない」と述べ、進路の未決定に不安を募らせている。

現在、4名は大学や専門学校への進学を希望しているので顕在化していないが、職業生活への移行にも課題を抱えていることが推測できる。⁶²を除き、うつなどの精神的疾患を抱えている4名は、現在にいたるまでアルバイト経験がないことが共通している。⁶⁰も、「高校中退して以来ちょくちょく考えることはあったんですけど、当時ちょっとうつ気味でアルバイトどころじゃなかったのと、2回目の高校の時も進学か就職かって考えた時にやっぱり進学したいって思いが」と述べている。もちろん、アルバイトをしていないことが将来の職業生活に影響を与えると断言することはできないが、そのリスクは否定できないだろう。

(2) 情報へのアクセス・仲間との触れ合い・職場実習

健康上の問題のほか、高校中退者が必要と感じている社会サービスについて概観してみよう。総じて、進学や就職など将来の見通しが立っている者には、社会サービスに対する要望は少ない傾向にある。ただ、その裏返しとして、将来の進路がまだ確定していない「就学にむけて準備中」の者には、将来の選択肢にまつわる情報へのニーズが高い。⁶⁴は「大学の情報とかその、私立のお金のかかる所だと宣伝がどんどん勝手に来るんですけど、国公立だと、こっちからその名前を知って調べないと出てこない。そういう相談に乗ってくれる所や人です」と述べ、特に、公的機関での進学に関する情報の不足を指摘する。また、高卒認定試験などについて、「そういう何か説明の冊子1枚くらいあってもいいんじゃないかなって」と述べる⁶⁵、「このような（病気を理由に高校を中退したという）立場の場合、むしろ、（高校を）辞める前に何かサポートがあったほうがいいのかというのがあります。辞める前のアドバイスです。……『ここに連絡すれば、そういう情報がある』という。手がかりだけでももらえると、ずいぶん違うと思います」と述べる⁶¹のように、中退する前に今後必要になる情報を提供してほしいとの要望も根強い。

さらに、将来展望を見出しにくい者は、単に情報だけでなく、仲間との触れ合いや職場実習など、情報だけでなく幅広い経験の機会を求めている。「高校を辞めた後で、どんなことをすればいいとか、どういうところに行けばいいとか、そういうのを教えてくれる感じのところがあれば、と思いますね」と言う⁵⁹は、中退を経験した先輩の進路の話を知りたいとも語っている。「仲間と一緒に活動できる施設」を要望する⁶⁰も、「高校中退経験者の話を聞いてみたい」と述べる。⁶²は、「相談する施設が必要というのは本当に何から手つけていいか全然わかんないから、それを一つずつ相談していけたら」と述べ、さらに「同じような経験を持つてる人と一緒にいたり話したり」する要望を語る。そして、目標が決まれば、「職場実習のような仕組み」も必要になると言う。これらの3人は、先に述べた健康上の問題を抱えていることも無視できない。「先が見えてないっていうのが一番不安ですね」と、進路が決まらないことへの不安を表明する⁶⁶も、地域若者サポートステーションのような相談機関や職場実習の機会を利用したいと述べている。

そのほか、教育制度に関するニーズも、いくつか挙がっている。通信制高校に在学する⁶⁷は、自分が進級できず中退にいたった経緯を振り返り、公立高校の中で必ずしも進級要件が同じではないことを指摘して、その画一化を求めている。また、大学に在学する⁶⁸は、中退後に、自分のペースで勉強を続けることのできるサポートの必要性を指摘している。

しかしながら、全員が社会サービスを積極的に求めているわけではない。社会サービスは「あらかじめ出揃っているから、特別に必要ないんじゃないかな」と、⁶⁹は述べている。また、在学時から教員の対応に大きな不信感を抱き、「もう誰にもなんも言わなくなりました」と言う⁷⁰は、「相談できる施設があっても行かないと思います、これは。あまり知らない人に相談したりとか、大人に相談するってしたくないっていうのか」とも述べて、社会サービスに対する信頼がないこと

を表明している。

以上のように、高校中退者のニーズを探っていくと、そこには二つの異なった水準を見出すことができよう。一方で、高校中退者は、自分の現在の境遇に必要なニーズに応じて、最も適切な「手段」は何かということを知ろうと努めている。このとき必要なサポートとは、そのニーズを満たす社会サービスに関する情報を的確に提供することであろう。他方で、高校中退者の中には、自分の取るべき将来展望が分からないと感じている者も少なくない。自分の境遇がはっきりしない以上、そのニーズもまあいまいなままになりがちである。このとき必要なサポートは、「手段」に関するものではなく、むしろ「目的」に関するものだと言えよう。つまり、様々な人々と交わり、いろいろな試行錯誤の経験を積むことによって、多くの選択肢の中から自分が目指すべき「目的」を絞り込むプロセスこそ必要となる。したがって、高校中退者のニーズに応えるためには、この二つの水準を含む社会サービスの供給システムを構築する必要があると言えよう。

中退までの経緯

北海道大学大学院教育学研究院教授 宮崎隆志

Findings

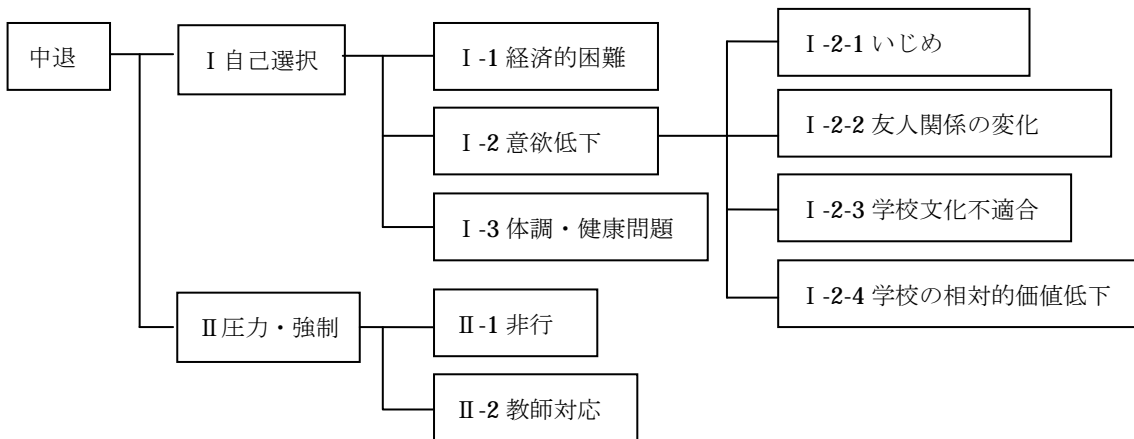
- ① 中退要因は以下に区分できる。1) 経済的困難性：必須となるアルバイトと学業との両立が困難、2) いじめ：信頼できる他者関係が形成できず、本調査では体調不良を伴うまでに至って就学を断念、3) 友人関係の変化：仲の良い友人の存在の有無・留年による下位学年との交流の可否・特定のパートナーとの関係の在り方が、学校にいることの意味に影響する、4) 学校文化不適合：自身が想定するライフコースや文化と学校文化との差異、5) 学校の相対的価値低下：学校以外の活動に価値を見出す、6) 体調・健康問題：偶発的な発症のほかに学校の競争的環境が原因と思われる場合がある、7) 非行：処分による退学のほかに欠時等による進級困難、8) 教師対応：教師の非応答性や学校側からの退学要請。
- ② 中退要因の累積的関連を緩和するのは、経済的困難性の程度及び信頼できる他者の存在であり、本調査からは友人関係の在り方及び教師対応の在り方が中退リスクを左右すると言える。

I 課題

ここでは中退に至るまでの経緯に焦点を当て、学校を去るという選択がなされる背景を確認する。中退は様々な要因が相互に絡み合いつつ発生する現象であり、単一の要因には決して還元できない。以下では第一に、主導性あるいは最終的な規定性を発揮したと思われる要因を基準として分類を行い、中退現象の諸側面とそれらからなる全体像を素描する(Ⅱ)。第二に、それらの要因の相互関連に着目して、高校中退という決断が迫られた問題構造と回避可能性を確認する(Ⅲ)。それは同時に、求められる支援的介入の課題を明らかにすることにもつながると思われる。

II 中退の背景要因

ここでは中退要因を八類型に区分した。予めそれらの相互関連を示すと以下のようなになる。第一に、現象的には自らの判断と選択による場合(I)と、直接的には何らかの圧力や強制によって退学に追い込まれた場合(Ⅱ)を区分し、第二に、Iを背景要因に従って、経済的困難(I-1)、意欲低下(I-2)、体調不良・健康問題(I-3)に、同じくⅡを非行(Ⅱ-1)、教師対応(Ⅱ-2)に区分した。さらに第三として、意欲低下をもたらした要因に即して、I-2をいじめ(I-2-1)、友人関係の変化(I-2-2)、学校文化不適合(I-2-3)、学校の相対的価値低下(I-2-4)に下位区分した。以下では、この区分に従って中退までの経緯を確認していくが、実際には一つの事例の中に複数の要因が存在するため、同一事例が重複して紹介される場合もある。なお、授業について行けず、単位が不足し、退学に至るという経路はI-2-3の一部を除き共通している。ここではそのような事態は前提とした上で、その事態を招き、打開できない背景に着目して叙述を進める。



1 経済的困難（I-1）

家計の厳しさは、進路選択や生活設計に際して、種々の配慮を払うことを子どもたちに迫る。自由度が限定された中での主体的な判断が要請されることになる。そもそも進学時点でも低学費やアルバイト就労可能性が考慮されているが、入学後にはアルバイトとの両立を余儀なくされる。

最初本当は、地名 A の 5 年制の看護学校（ママ※引用者注—看護に関する学科と思われる）行きたかったんですけど、結局通学だったりとかお金の面でもやっぱ公立のほうがいいってなって。〔1〕全日制・その他の専門学科)

今回の 41 ケースで在学中からアルバイトをしていたことを確認できた者は 21 名であるが、母子世帯に属する者 10 名では、不明の 1 名を除く 9 名が在学中からアルバイトを行っていた。経済的困難が中退理由として浮上してくるのは、必須となっているアルバイトと学業との両立の困難性が増大し、前者を優先せざるを得ない場合である。〔2〕は、入学直後からアルバイトを開始しており、その結果、単位取得が困難になり、退学を決意するに至った。〔3〕の直接の退学理由は妊娠を契機とした登校困難と単位数不足であるが、その背景には厳しい就労状況があった。

ホームセンターは営業時間が（午後）8 時までで、当時まがりなりにも高校に通っていたので、（午後）5 時から出勤だった。3 時間が週に 4 日、これだと収入が少なく、それで 10 時まで働けるところと思ってコンビニでバイトすることにした。〔2〕

結構なんか週に 1 回しかない授業は、8 回休んじゃ駄目だったのかな、それとかバイトしながらだったから危なかったんですよ。学校から 10 時に家に帰ってきて、朝の 6 時から働いて 1 時に終って 4 時から学校って生活で 4 時間くらいしか寝てなかったんですよ、毎日。〔3〕定時制・普通科)

さらに就労が親からの要請である場合は、経済的な圧力は一層強くなる。その理由を確認すると、第一に、アルバイトと学業との両立が困難になる事態に至っても、家族が中退に対する抑制機能を発揮できないため、経済的圧力が貫徹してしまうことがある〔4〕。第二に、親への配慮から自主的に就業に比重を置き退学に至る場合も、経済的な圧力が作用していると見てよいであろう。〔1〕は、両親の離婚を契機に、「母親を経済的に支える」ことを考え、中退を決意した。第三に、親からの支援を期待できないため、将来への貯えも自らの就労によってなさざるを得ず、学業との両立は一層困難な

課題となる。例えば〔5〕は中学卒業時に就労を要請されている。その下で高校1年からアルバイトを開始し、専門学校進学也希望もあり学費を準備するために、一時期は掛け持ちで就労した。しかし、家計からの支援が得られないこともあって、結局それも断念し、退学（転学）に至っている。第四に、就労に加えて家事の補助も必要になる場合がある。〔6〕は大家族であるため、家事にも時間を割かれ、結果的に学校に通う時間がなくなってしまう。

高校1年からアルバイトを始めた。家があまり裕福ではなく、親から高校生になれば働けるから、家に2万ずつ入れるようにと言われた。給料から携帯代も払わなくてはならないし、家に2万円入れたら、手元に残らないし「無理だ」と思った。…また、仕事をはじめてから何か月もたってなくて、ストレスに感じ仕事が辛かった。仕事と学業の両立が難しいなと思ってきた頃に、高校の先生の話やインターネットの情報から、通信制の高校があることを知った。学校は、面倒になり行かなくなっていった。〔4〕
定時制・普通科)

1年生の時、学校終わった後は、もう家のことばっか。兄弟の世話とか。…バイトとか家のことで、学校あんま行けなくて、学校行けない時間多いなら、通信に移動したほうがいいかなあって思って。〔6〕
定時制／単位制・普通科)

これらはいずれも進級の困難に直面しているが、学習時間を確保できないことが学力形成の困難をもたらしていることは自明であろう。

2 いじめ（I-2-1）

いじめが退学原因となる場合は、困難の長期性が特徴と言える。高校入学以前からいじめあるいは人間関係の困難にさらされ、高校での学習や他者関係の形成が困難になり〔7〕、〔11〕、あるいは高校でのいじめが最後の一撃となって就学を断念するに至っている〔8〕、〔9〕、〔10〕。該当事例としてとして取り上げた5名全員がうつ病や体調不良に追い込まれている。

中学校から「自分が一人きりだと感じる」ときがあった〔7〕は、中学時代の「嫌な人」が同じ高校に入りいじめにあい、1年生9月頃から学校に腹痛や倦怠感を訴え、病院に通い始めた。〔11〕は、小中学校時代からのいじめに加えて、高校の教育内容が想定したものと異なり、留年して2回目の1年生の10月頃にうつ病になった。

〔8〕は離婚などを経験するという複雑な家庭状況の下で小学生の頃から「あんま同級生とか好きじゃない」状態になり、「中学校時代からもう同級生やら先輩やらとのやりとりは面倒くさくなって」、高校1年では荒れて目をつけられるまでに至っていたが、偏見やいじめなどいろいろあったことで「もう壊れてたらしく」、うつ病と診断された。〔9〕は、小中学校からいじめにあい「人間恐怖心」を持つまでに至っている。誰ともしゃべらないようになりながらも中学には通い続け、高校でも1年間は頑張ったものの、出席日数不足を告げられ退学に至った。〔10〕は中学校・高校といじめを受け、高校では中学校から「あまり仲の良くない人たち」と再び同級生になり、声が出なくなり熱が出るという身体症状を呈するようになった。これらのケースのうち、高校でもいじめを受けた場合は、いじめを含む困難な状況を教師が理解してくれず、適切な支援も受けられなかったと感じており〔8〕、〔9〕、〔10〕、教師・学校との信頼関係は築けていない。その一方で、親との関係は良好である。

いじめ的なことがあった。勉強も分からなかったし、体調も崩し始めて、高校1年の夏休み明け、9月ぐらいから学校を休むようになった。そのまま辞めるまで休んでたって感じ。1月で留年するかしな

いかを決めなければならなくて、そこで留年するよりは、新しい学校に入ったほうが良いと決めて、それで1月で中退することに決めた。(7「大学・短大進学者が多い全日制・普通科高校」)

部活でのふざけ合いからいじめに発展した。授業中に背中に画鋏さされたり、机の中の教科書の中に釣り針が挟まっていたり。…さすがに高校になると、先生に相談しづらいというか、言えなかったですね。高校の先生も、うすうす気づいていたと思う。…クラス替えをしてから、中学校からあまり仲の良くない人たちばかりと同じクラスになった。そこでちょっとトラブルみたいなのがあった。そのせいで声が出なくなり、熱がでてしまうようになってしまった。このままでは、治療費がすごくかかってしまうので。欠席が1学期だけで50回近く、さすがにこれはまずいなあと思ったので、高校はあきらめて。

(10「高等教育機関(専門学校を含む)進学者がそれほど多くない全日制・普通科高校」)

小学校、中学校の2年くらいまでですかね、いじめじゃないですけど、そんな感じがあって、中3の時くらいからは特にそんな酷くなくて、その後やっぱり、いじめはいじめでまたあって、もう一つは、自分がゲームとか好きなので、そういうのに関われればいいかなと思って、その会社に入ればいいかなと思って工業目指して入ったら、自分があまりレポート書きっていうか、そういう提出物が苦手なんです。それが一番多いクラスだったんですよ。…そういうので(うつに)なったといえなかったですね。自分が思ったのと違ったっていうのが一番大きかったですね。(11「全日制・工業科」)

3 友人関係(同世代の他者関係)の変化(1-2-2)

思春期以後の子ども・若者にとって、友人(同世代の他者)は自己形成に最も影響を与える存在であり、学校は友人を形成する場として特別な意味を持つ。いじめは友人関係からの排除であり、その影響の甚大さは以上で見たとおりであるが、そこまでに至らなくても、友人関係の種々の変容は学校にいることの意味に影響を与える。

(1) 友人との別離

友人達と何らかの理由で別れ、その関係から切り離されることが在学意欲の低下を招く場合がある。(12)は、1年生の段階で仲の良かった友人が退学し、2年生では友人グループが次第に解体し、最終的に一人になった時点で退学を考えている。(13)は中学時代に仲の良かった友人が進学した学校に進学できず、「そんなに楽しくない」と感じ、1か月で退学している。

なんか私が1人になった時期があったんですね。クラス内でなんか1人であることが多くて、それがでも11月、12月ぐらい。でもまあそんなんでも辞めちゃあなあって思って、そんな時は頑張ってたんですよ。…それで辞めるってなったのが、なんか朝の授業の単位が危ないってなって…今も仲良くしている友達がいるんですけど、同じ高校にいて、その子も一緒に辞めちゃって、私と一緒に辞めちゃって。学校が楽しければ行ってたんですけど、楽しくないし。(12「高等教育機関(専門学校を含む)進学者がそれほど多くない全日制・普通科高校」)

高校行こうと思ったのは、とりあえず行こうかなあと思ったから。中学の時に、仲良かった友達が違う学校なんですけど、そいつ結構頭よくて、見た目の割に。俺はそんなに勉強できないんで、そこ行けないなと思って。本当はそこ行きたかったんですよ。(中退した高校へ入学して)ひと月ほどで辞めました。高校へ入って、そんなに楽しくないなって。なんか別にやりたいこともないし、友達もそんなに、その学校にあまり行かなかったんで。(13「高等教育機関(専門学校を含む)進学者がそれほど多くない全日制・普通科高校」)

(2) 下位学年集団への編入の拒絶

留年し、下位の学年集団に編入されることを好まずに退学する場合は多いが、それも友人関係を築きづらくなることが一因と考えられる。^[14]は、進学先も友人たちと相談して決め、入学後は「友達がみんなそうだったので」学校に通わなくなった。留年が確定すると「留年してまで行きたくなかった」ので「もういいや」と考えて退学したが、友人も連鎖的に退学したという。留年は、仲の良い友人たちと疎遠になることを意味していたのであろう。^[15]は不良グループに属しながらも、ゲーム「オタク」ともつきあいがあり「みんなと仲良かった」という。2年生に上がれないと言われて、「じゃあ辞めます」と答えているが、その理由は学年が下の生徒とは仲良くなれそうにもないというものである。

高校に入ろうと思ったのはノリで。友達が行くから。…みんなと仲良かったですね。…2年生に上がれないって言われたときに、じゃあ辞めますみたいな。…1コ下とやるようになってしまったじゃないですか。それも多分できないと思うので。なんか嫌じゃないですか。1コ下とやるっていうのが。授業受けるのが。あんまり仲良くなれそうにもないので。^[16]「高等教育機関（専門学校を含む）進学者がそれほど多くない全日制・普通科高校」

(3) 特定のパートナーとの関係

特定のパートナーとの関係に重要な意義を見出し、学校に留まったり、去る場合もある。これも同世代の他者との関係が選択・判断の要因になっている事例の一つである。

^[16]は「あと1日休むとアウト」という状況に陥ったときに退学を考え、彼女の妊娠が判明したことを契機に中退している。^[17]は「仲間割れ」の結果、彼氏と「さぼっちゃおうか」と投合して休むことが増え、その頃から退学を考え始めている。^[18]も友人関係が縮小する中で、同棲していた同学年の彼氏と行動を共にすることが多くなり、トラブルを機に二人で退学した。

何かの授業があと1日休むとアウトになって、その時は実家において、親に「今日行かなければやばいんだけど休みたい」って。それで辞めちゃうかみたいな話になって。そのちょっと後に子どもができてるとわかって。^[19]「全日制・その他の専門学科高校」

あんまりちゃんと学校に行っていなかった。1年生の3学期から休みがちに。仲が良かった人が何人かいて、結構仲間割れみたいなことが多かった。友達とごたごたして、彼氏がいたんですけど、さぼっちゃおうかみたいな。^[20]「高等教育機関（専門学校を含む）進学者がそれほど多くない全日制・普通科高校」

最初の頃はクラスの女子グループで過ごすことも多かったが、仲の良い子がどんどん辞めてしまったりしたので、学校でも彼氏といることが多くなっていった。…直接にきっかけになったのは、中退直前にすごい喧嘩をしてしまって、二人とも学校に行きづらくなって一緒に辞めてしまった。彼氏が喧嘩した相手が私にも言ってきたので、二人とも喧嘩になっちゃって。以前から、何度もそういうことがあって、学校で浮いてる感じの状態だったので、どんどん行きづらくなっていった。^[21]「定時制／単位制・普通科」

4 学校文化不適合（I-2-3）

入学後に、特定の他者とのトラブルというよりも、学校の文化的環境そのものへの違和感から退学に至る場合がある。

(1) 学校文化・教育内容への違和感

本人が想定するライフコースと高校のライフコース形成機能や学校文化とのギャップが違和感を生み、退学に至るケースがこれに該当する。入学前に一定の進路志向が明確であった場合は、当該高校の教育内容が想定とは異なったため、結果的に学習意欲を失ってしまうこともあれば〔19〕、当初の進路志向を保持するために、当該高校に帰属意識を持つことを自覚的に回避する場合（「ここに馴染んでしまうとなんかそれ以上ないような気がして」〔20〕）もある。

他方、高校入学後に独自のライフコースを志向し始め、学校文化とのギャップが顕在化しはじめることもある。〔21〕の場合は、高校での成績はトップクラスであったが、それが理由になって周囲の生徒との人間関係の困難さ（「ほかと全てに対して意欲が合わない」）を経験している。高校の学習への不安がないことから、受験勉強だけではない学習経験を志向し、意識的に「普通科の高校をストレートに卒業するっていう肩書」を捨てている。ただし、〔21〕の場合は、中学時代に「燃え尽き症候群」と解釈し得るような状況に陥り、20日ほど学校に通っていない。受験・進学との関係のみで意義づけられた学習への疑問が、学校以外の場での学習を志向させたことに留意する必要がある。

公立高校に進学しましたが、小さい頃から、パソコンが与えられていたので、タイピングとかも得意で、絶対パソコンの事を学べる学校に行きたいっていう気持ちがあったので、そこを選びました。でも入って見たら簿記とかそういう科目でつまずき、想像と何か違う部分があってそれなら働いた方がいいんじゃないだろうかっていう考えになりました。教科書買いに行った日に、びっくりした感じです。〔19 全日制・商業科〕

公立高校Bを受けて落ちました。第二志望の私立を受けてなかったんで、合格発表後に願書が間に合う定時制の公立高校Aに進学しました。公立高校Bの受験を決めたときに落ちたら自分で勉強すればいいと思ってたんで、そもそもほかの高校を受けるつもりがなかったんです。そのうち段々居心地が悪くなってきたんですけど。授業も退屈な感じで。学校にあまり馴染もうとしなかったかもしれません。ここになじんでしまうとなんかそれ以上ないような気がして。最初から大学に行くことは決めていました。学校ではほとんど誰とも話をしませんでした。結構授業もさぼっていましたし、休んだりすることも多かったです。〔20 定時制／単位制・普通科〕

これらの事例では、自らのライフコース志向は家庭の文化資本に規定されており、家庭と学校の間の文化的差異が不適応の背景にあるとみることも可能である。

(2) 多数派同級生の志向性への違和感

以上とは反対に、必ずしも明確な進路意識を持たないままに入学し、多数派の同級生の志向性との間にギャップを感じた結果、退学に至った場合もある。〔22〕は制服に憧れて入学するが、進学志向の同級生に対しては「性に合わない子が多かったですね。クソ真面目な子が多くて、冗談も通じなくて」という感想を抱いている。〔23〕は「自分の頭の良さとか学歴を鼻にかける」周囲の同級生に違和感を持ったという。高学歴の親の期待に応えつつも、親の職業を継承したくないというジレンマが背景にあるように思われる。この両者の場合は、進学した高校の生徒の多くは大学進学を志向しており、何らかの理由でそれに同調できないことが退学理由となっている。

〔24〕は獣医になりたいという希望があったので、明確な進路意識がなかったとは言えないが、それを断念した後は目標の再設定ができないままに、学校や同級生に馴染めず休学を選択し、翌年復学後に退学している。

(3) 学校での友人関係の形成困難

これらは、学校文化の問題であると同時に、当該学校が友人関係を形成する場として機能しなかったことをも意味しており、友人関係の形成の困難さとして理解することも可能である。19、20、22の友人は当該高校以外にあり、21はボランティアとして通っていた自身の出身保育所がもう一つの学びの場になっていた。24の交友関係はスナック等のアルバイト先で展開していた。

5 学校の相対的価値低下 (I-2-4)

(1) 学校外での表現活動に価値を見出す

学校は進路形成のための手段、あるいは仲間づくりの場としての機能を持つが、新たな進路の見通しが立ったり、打ち込める活動が見つかり、相対比較の結果、学校の価値が低下し、在学し続ける意欲が低下することがある。

活動の対象は多様であるが、ダンスや音楽といった表現活動は価値が見出されるジャンルのひとつであろう。25は、「普通に高校に行って、大学に行ってサラリーマンみたいな流れがすっごい嫌」になり、学校が「面倒くさくなって」休学するが、ダンスに興味を持ち、のめり込むうちに、復学してダンス部に入るという選択肢が浮上した。「やっぱはみ出したら、変に思われたりとかするし、偏見あるしとか、やっぱ普通に生きていくのも嫌だし」と、中退に対する偏見と普通に生きることへの拒否感の両極の中で揺れ動きつつ、学校の価値が模索されている。

26は、在学中から音楽活動に携わり、徐々に自立への見通しを得ているが、それに伴い学業との両立が困難になり、学校よりも音楽活動を選択し中退に至った。この背景には、中学時の教師不信と不登校体験や、高校でも授業よりも友人との付き合いに価値を見出すことに示唆されているように、元々学校の制度的な価値が低下していたことも作用している。なお、26の場合は、最終的には校則によって退学を余儀なくされており、強制による中退と見ることも可能である。

(2) 働くことに価値を見出す

在学中に行われるアルバイトにおける充実感が、学校の価値を相対的に低下させることもある。27は家庭にも学校にも居場所を見いだせない中で、休学中に開始した美容院でのアルバイトで最初の給与を得た時に「すごく嬉し」かったという。同時にお金を稼ぐことの大変さを改めて知り、「しっかり」しなければと決意し学校に戻るものの、「やっぱ働いているほうがいい」という理由から中退に至っている。

ただし、「働くことの価値」には、働く必要があるが故に見出される手段的価値が含まれる可能性にも留意する必要がある。例えば27の場合でも、世帯が母子世帯であり、母親を経済的に支えたいという志向が働いている下での価値判断であった可能性を見ておく必要がある。

美容院で初めて給料もらった時に、こんなに大変なんだと、稼ぐことが。で、今まで本当に、ただみたいにお小遣い、お小遣いって言ってもらってたんで、その時の給料がすごく嬉しくて。それくらいから、しっかりしなければなあってなってきた、ちょっと変わってた。…結局、この年の12月後半くらいから、1回高校戻ったんですよ。やっぱり、高卒くらいは取らないといけないなって戻ったんですけど。その時は、母親は喜んでたんですけども、だんだんやっぱり合わないなってなって、やっぱ働いてるほうがいいって、やっぱりお金もらえるわけだし、ってなって9月に辞めるって。27(全日制・その他の専門学科)

6 体調・健康問題（Ⅰ-3）

健康問題によってやむなく高校を去る場合もある。ただし、この場合も健康問題は複合的要因の中の一つにすぎないことに留意する必要がある。つまり、健康問題をきっかけにして、付随的な問題が連鎖的に発生し、退学に至っている。

（1）病気・怪我

病気の発症や怪我によって通学が困難になる場合もあるが、今回の事例による限りでは、退学理由はその結果生ずる困難との複合的な作用の中で形成されるとみてよいであろう。例えば[28]は、病気の結果として生じた「下位学年集団への拒絶」も退学理由となっている。また、「8」で言及する[37]は、怪我による欠課も退学の要因であった。

（2）精神的ダメージ

病気・怪我よりも多く見られるのは、精神的なダメージに起因すると思われる体調不良や精神疾患である。該当する三事例による限りでは、第一に、いずれも「大学・短大進学者が多い全日制・普通科高校」に在学していたこと、第二に、いずれも本人たちが学校生活に適応すべく努力をした結果、一種の挫折感を味わっていること、が特徴である。

[29]は教育熱心な親の下で私立小中学校、中高一貫校に通い、「毎月いっぱいいっぱいになりながら格闘していた」が、中3の秋に「糸がプツンと切れたように、体も気持ちも登校拒否」したという。高校でも通えない状況にあったため留年し、再起を期すものの「ガクってまた行けなくなって」退学することになる。

[30]は、中学時代は水泳部に所属し、高校では生徒会活動に携わるなど、積極的な学校生活を送っていたが、2年生になった頃から「教室に入るのが怖い」という現象が生じた。診断の結果はうつ病であった。本人は「自分が思ったよりも勉強ができない」、つまり勉強しないのに、それでも点数が欲しいというギャップを理由に挙げている。この健康不安によって中退を決意している。

[31]は、トップ校に進むが、勉強についていけなくなり、「頑張ろうとも思えなく」なり、中退を決意している。単位を落とすという状況ではなかったが、「私の中では辞めたいくらい深刻なことだった」という。この事例は病気としての診断名がついているわけではないが、深刻さの度合いを勘案して、このカテゴリーに含めた。

7 非行（Ⅱ-1）

非行はその程度によっては退学処分を招くが、そこまでに至らないとしても、欠席・単位不足・進級困難をもたらすことにつながる。

（1）処分

言うまでもなく重大な非行行為の場合は、退学処分が下される。[32]は、測量士になるという将来展望をもって希望する工業科に進学したが、同級生に対するいじめが発覚し、退学処分を受け中退に至った。親は事態を教師から初めて知らされ、本人も後悔するような経緯であった。

このような退学処分に直結する非行行為でなくても、それが積み重なることによって学業の継続が困難にある場合もある。[33]は高3の6月に退学しているが、それまでに喫煙や不法侵入を理由とする処分（学校謹慎）を受けている。この処分では通学しているので欠席扱いにはならず、退学には直結しなかったが、自転車の窃盗が3回目の事案となり停学処分が科された。これにより留年が確定し、教師も親も就学継続を勧めたものの「その後戻ったとしても、1コ下の学年とやるようだ

ったんで、自分的にも切り替えをしたかった」という理由で退学を選択している。³³の場合も、学校生活は「入ってみてめちゃくちゃ楽しかったっすね。資格もたくさん取れましたし」というように充実していたと思われる。

「8」で見ると、このような状況では教師との関係が悪化するために、退学の瀬戸際に追い込まれた際の支援を受けにくい場合もあるが、この事例では、教師はコミュニケーションが困難な状況の中でも中退後までサポートを続けている。³²は通信制高校の情報はこの教師から得ていた。

担任の先生が、こういうのがあるよって。もう学校辞めたのに電話かけたり、家まで来たりしてたんですけど。最初その先生嫌いで、(途中から) いい先生なのかなと思いはじめて、今その先生には感謝しています。そのとき、一番やんちゃしてたころだったから、酒も飲んでたし、タバコも吸ってたし、髪の毛だって栗色でツンツンに立てていた時期で。³⁴

(2) 社会的圧力

学校からの処分というよりも、非行行為に伴うストレスや家族に与える社会的な影響によって、退学という解決策を採らざるを得ない場合もある。³⁴は、「凄まじい」荒れの中で、2年生になって机を窓から投げられたことを契機に「暴れすぎ」、相手のグループと揉めて学校にも行けない状況に陥ってしまう。家族に迷惑をかけることもあり、結局、「もういいかなと、面倒くせーや」と思い退学に至った。

8 教師対応 (II-2)

教師はルールの制定者、評価者として学校文化を規定する主要な要因の一つである。その教師と応答的な関係が築けないことは、学校という場そのものへの違和感や拒否感を生じさせることにつながる。

(1) 教師対応の非応答性

高校生が何らかの困難に直面した際に、相談する相手は親(親戚)・教師・友人・アルバイト先の仲間にはほぼ限定されている。その中でも教師は学習、進路、生活に関わる問題を相談できる可能性を有する存在として、大きな比重を占めており、それだけに困難や危機の克服・回避にあたっては大きな影響を与える。特に、親との関係や友人との関係に困難が生じている場合は、その相対的な比重と影響力が一層大きくなる。高校生との応答的・共感的なコミュニケーションが築けない場合は、困難な状況にある高校生はそこに排除的なメッセージを読みとることもある。

例えば³⁵は、遅刻・欠席が重なりテストも受けなかったため進級できず、高校2年の3月に退学するが、この背景には教師への不信感と嫌悪感がうかがえる。すなわち、校則・教師対応の厳しさもあるものの、それ以上に「なんかちょっと言っただけですぐ謹慎」になるという教師対応の一方性と、評価基準が生徒に応じて異なるという対応の不透明性(生徒からすると差別的対応)によって、「先生がみんな変わっていて」という印象が生じていると考えられる。さらに信頼していた教師に対しても、職員室で「生徒の悪口言っているのが聞こえてきて」、「もうだめだ」と思うに至る。教師とのコミュニケーションの回路が断たれ、学校という場に居続けること自体ができなくなった(「『辞めよう』じゃなくて『もう行きたくない』」)ことが退学の要因と見てよいであろう。

「最後の最後で先生がダメになっちゃって」という発言は、教師対応の持つ意味の大きさを端的に示しているのではないか。

生徒が抱える困難の総体を教師が把握することは容易ではないが、その結果、生徒・教師間のディスコミュニケーションが生ずることもある。³⁶は、入学直後に病気のため入院する事態に陥るが、退院後にクラスの人間関係に困難を感じるようになる。また、両親が障害を持っており、家庭でのコミュニケーションの困難も抱えていた。病気がちのため、結果的には留年を選択したが、クラス内の人間関係は次第に困難になり、親との関係もうまくいっていないと感じていた。また病気による体調不良もあって登校できない状況が続いていた。「家もいづらいし学校も気持ち悪いしで、ものすごい落ち込んでた」にも関わらず、本人によれば、担任の教師はそのような状況を理解してくれず、その教師とのコミュニケーションを断念している。

もとより、³⁵、³⁶の発言は本人の側の理解を述べたものであり、客観的な状況は定かではない。しかし、大事なことは、本人たちが退学を選択せざるを得なかった背景には、このような状況理解があったという事実である。

(2) 教師・学校による退学要請

処分と救済の間の境界線は、個々の学校によって異なるし、管理職の方針によっても変化する。

学校側が寛容性を低下させ、「ルール」を厳格に適用することにより、退学を余儀なくされる事例もある。³⁷によれば、新たな校長の下でルールの変更(厳格化)がなされたという。以前は実質的には髪を染めることができたのに対し、変更後はそれもできなくなった。留年・中退者も多く、「おとなしい人だけが残る」という状況にあった。³⁷自身は授業を抜け出しコンビニ行く程度の高校生活であったが、ケガが原因で入院した際、退院後に直ちにレポート類を提出することを全ての教員から要求され、対応できなかった。結局、入院期間は欠課扱いになり、それによって「終止符を打たれ」留年が確定したことが契機になって退学を決意するにいたっている。このような教師の対応の背景には、それ以前の荒れによる生徒不信、一方的な対応という学校文化に関わる問題が潜んでいる可能性もある。³⁸の場合も同様であろう。

より明確に、退学しか選択肢がないことが教師から告げられる場合もある。³⁹は、高校入学後、授業中に座ることができず、保健室に通うようになる。その結果、単位不足で進級が困難になった際に、担任教師から留年はできないとの「理由」で、辞めることを強要されたと本人は受け止めている。³⁹によると、在学していた工業高校の科によって対応が異なっていたとも述べており、実際の状況はともかく、そのような理解からすれば、この対応に納得できるはずはなかった。本人は就学の継続を強く望んでいたが、結果的に断念させられている。

⁴⁰は、高校3年で妊娠に気づいたが卒業することを希望していた。本人は休学した上で、引き続き卒業することを望んだが、休学は認められず、結局、退学することになった。この事例の場合は、教師との関係は良好であったが、学校側としての対応によって退学以外の選択肢がなくなった。

高校の側も、自分がかれこれ4か月学校に行っていないっていったら、もう出席日数足りないの分かっているじゃないですか。9月ぐらいには、こちらから先生に「もう課題はないんですか」っていう話しをしてたんですけども、そしたら「大丈夫大丈夫だ」って言われてたのに2月の終わりぐらいに、進級の会議の時に決まったって言って、突然2週間分ぐらいの課題を出されて、そしたらその時期に重なって追試のテストがある。2週間で、それもほぼ全教科で、内容も内容でノートの丸写しとか。その時は進級したいって気持ちがあったので。…3月ぐらいになったら、担任の方からもう留年だって話しを受けて。高校自体が、なんかしたら「お前だろう」みたいな、そういう感じの立場だったんですね。…そ

ういう感じの子をどんどん切り捨てていく感じの高校なので。〔38〕「高等教育機関（専門学校を含む）進学者がそれほど多くない全日制・普通科高校」

学校に行っても授業に落ち着いて座ってられなくて、うろちょろして。最初の何分かはノートもちやんと書けたんですけど、途中から飽きちゃって、フラフラと。毎日学校には行っていたんですけど、授業の日数が足らなくなって。それで保健室にいました。3学期に入ったぐらいから、お前はクビだといわれて。担任の先生が「辞めろ」「要らない」と。（当該高校での留年ができないから）「どうするか考えとけ」と言われて。最後の最後まで「辞めたくない」と言い張ったんですけど、無理で。その時はむかつきましたね、先生に。自分がだらしなかったから、進級できないのはわかっていたんですけど、それでも「辞めろ」しか言わなかったの。で。（退学した時は）「あー」で。もう半分泣きそうになってましたね。中学の時から付き合っていた彼氏もずっと一緒だったので。「なんかもうお前と一緒に高校出来ないんだ」と泣きながら言われたことがあって。〔39〕全日制・工業科

Ⅲ 中退要因の関連構造

1 経済的困難による対応の自由度の制限

経済的困難は選択肢も時間も制約する。「Ⅱ 1」で見た諸事例は、家庭からの経済的支援が期待できないどころか、逆に支援することを考慮せざるを得ない状況に置かれていたが、実際にはこの中でも、従来からの低学力、いじめられたことによる別室登校や喫煙等による謹慎処分などで授業に出席できないという困難要因が加わったケースが含まれている。そのような場合は、学力形成のために一定の時間を確保することが求められるが、就労が前提となる下では、その必要時間を満たすことは難しい。今回の調査では十分に確認できていないが、この事情は子どもの支援に必要な資源（時間）を回せない親も同様であろう。経済的困難は、それ以外に付加され発生する困難への本人及び家族の対応能力を脆弱化し、中退に至るまでの緩衝機能を剥奪すると考えられる。

2 信頼できる他者の存在の重要性

成績不良や進級困難、あるいは学校文化への違和感があっても直ちに退学に至らず、一定期間高校に踏みとどまるケースでは、本人の努力がなされていることは言うまでもないが、より重要なのは、その努力を引き出し、支える他者が存在していることにある。いくつかの事例により確認しておこう。

(1) 友人

高校生にとって最も大きな「信頼できる他者」は友人である。「Ⅱ 3」で言及した事例は友人関係を重視したケースであり、友人の存在の意味の大きさは言うまでもないが、経済的な困難から進級できずに退学に至る場合（Ⅱ 1〔5〕）でも、学校になじめず反抗している場合（Ⅱ 2〔8〕）でも、あるいはいじめられ人間不信に陥っている状況（Ⅱ 2〔9〕）でも、仲の良い友人や信用できる友達が特別な存在として言及される場合がある。学校に行くことの意味はこれらの友人にあったのみならず、その友人が困難要因に対処するための支えになっていたとも言えるであろう。それだけにそれらの友人と何らかの理由で離れることは困難に向き合う支えを失うことを意味する。「Ⅱ 4」の学校文化不適合の場合は、既述のように学校外に友人を持つケースがあったが、その友人たちは本人が志向する文化（進路志向や遊び志向）を共有する中学時代からの地元の仲間であり、この場合は逆に当該高校からの離脱という選択を支える一つの要因になると考えられる。

また、健康問題との葛藤を支えたのも友人たちであった。Ⅱ 6〔28〕は「高校に行かなくなったときに、『ああこれもう友だち駄目になるかな』と思ったら、そうじゃなくてさ、いい人だった」と述

べ、Ⅱ 6 [30]は「(生徒会での活動に携わっていたことが) 学校に結びつけていたことになりませぬ、自分を。ありがたいことに投票でなったわけだから、その信頼を裏切るわけにはいかないの」と述べている。

教師・学校側との対立が生じた場合でも、友人の存在が本人の支えになっている場合がある。Ⅱ 5 [26]は就業を理由に退学を迫られているが、時間的な厳しさや学校側の要請があっても、在学にこだわったのは友人の存在であった。Ⅱ 8 [36]は再起を期して留年を決意するが、その決意を支えてくれたのは「部活の友だちが学年違っても全然変わんないと言ってくれて」いたことであった。

このように友人による支援機能は大きく、他の困難要因を打ち消す可能性を持つと言えるが、他方では、それだけの比重を持つが故に、信頼できる他者としての友人関係を築くことができなかつた場合は、他の困難要因への抵抗の基盤が脆弱であると捉えることもできる。いじめの危機にさらされる場合はもとより、いじめがなくても「向こうからはライバル視されて、一緒にやっけて負けるもんかという感じが伝わってくる」(Ⅱ 6 [29]) ような状況にある場合も、同様の危機の下にあると見ることはできるのではないか。

(2) その他の信頼できる他者

その他の「信頼できる他者」としては、親、教師、恋人及び学校外での大人の存在があげられる。教師については次節で言及することとし、ここでは学校外での大人の存在のみを確認しておく。Ⅱ 7 [33]は友人のアルバイト先の店長が困りごとの相談相手であった。「その店長いい人だぞって話聞いてたんで、その友だちと一緒に話とかしてたら、相談乗ってくれたんで」という。Ⅱ 7 [33]によれば「学校のこととか、恋愛のこととか。こんなことあったんですよ、って言ったら、それに対していい返事出してくれたりしてた」とのことで、20代後半のこの店長は、悩む高校生が冷静に自分を振り返ることを支えてくれていたと言える。

もう一つの事例は保育所との関わりをもっていたⅡ 4 [21]である。彼女は、入学当初から自身の出身保育所でボランティアを継続している。彼女によれば「そこの方たちは理解があって」、高校に行かなくなつてからは平日の昼間からのボランティアを認めてくれ、さらに高齢者福祉に関わる経験もさせてくれたという。本人の事情を了解した上での保育所側での対応と理解してよいであろう。

これらの事例からすると、学校以外での大人との出会いは、高校生の葛藤を支える上で大きな役割を持つように思われるが、今回の調査では上記の二例以外には明確に意味ある学校外の他者との繋がりを確認できなかった。すなわち、他の 39 名の高校生は学校外での大人との出会いの機会がほとんど持てない状況にあると思われる。これは中退者に限られない傾向かもしれないが、仮にそうであれば、このことが学校を巡って生じる問題の解決を一層困難にしているように思われる。

3 教師対応の重要性と可能性

教師の対応が中退の引き金になるケースについては、「Ⅱ 8」で確認したとおりである。これとは反対に、教師の対応が中退を思いとどまらせているケースも多く確認できる。

Ⅱ 1 [2]によると、担任は「その教室だけの校則を自分で作るような人で。頭ごなしにしか注意することしかできない先生」で「最悪」だったのに対し、前の担任は、「すごい先生」で「その人が先生だったら、なんだかんだ言って、3年間通えてたと思いますね」という。

Ⅱ 2 [11]は不登校状態になった際に、「学校に来るだけでも出てくれば、そのうち教室に入れるかもしれない」という担任のアドバイスによって登校するようになり、留年する際には、担任の家庭訪問や三者面談によって新学年とつきあう覚悟を固めている(「新しく入る1年生といろいろ変わるけど

一緒にやれる？って聞いてきたんで、一応やれますって。そっからやれるようにはなりました)。教師のサポートが危機を乗り越えた要因であった。

Ⅱ 3¹⁶は、前の担任が、アルバイトのことも知った上で、朝から学校で寝ていてもわかってくれて「とりあえず学校だけは来いよ」と声をかけてくれたり、進級時のクラス替えでも、「あいつは俺が面倒見ると引張ってくれた」ことを例にあげ、「すごくよくしてくれた」と謝意を述べている。そしてその時は「結構学校に行っていた」という。それに対し、別の担任は中退を相談しても「辞めちゃうの？」と言うだけで、特に引きとめられなかったという。

Ⅱ 8³⁶は中退時の教師の対応が決め手になり退学しているが、前の担任は、「ホントすごいいい先生で、毎日電話かけてくれた。たまに行ったときは最近どう？って言って、自分の不安な気持ちとかしゃべって、アドバイスもくれたり。親のこともめちゃくちゃ相談した」という。留年の覚悟を決める際、すなわちその時点での中退を回避する際には、この担任のアドバイスのほかに、中学校時代の信頼できる教師からの励ましもあった。

Ⅱ 8⁴⁰、前の担任の先生による差別があったため、「学校行かなくて耐えて」いたが、「次の担任の先生は凄いい良くて、それで行こうかなって思ってた」という。実際には「休み癖」がついていて、すぐには登校に至らなかったものの、教師の対応によって、学校の壁が大きく変動することを示している。彼女にとっていい先生とは「友達のように話を聞いてくれる」先生であるという。

これらの事例は、たとえ、いじめや友人関係の変化があったとしても対話性・応答性を備えた教師の努力は、それを乗り越える力を本人に与えられる可能性を示唆している。様々な困難が同時にかつ複合的に作用する中で必死に格闘している高校生の状況と意思を理解し、本人にとっての最善の利益を一緒に探求する教師が、信頼できる他者・大人としての役割を果たしていると言ってよいであろう。